



大仙市「明治150年」

第2回シンポジウム

報告書

テーマ

近代への道程

— 戊辰戦争と人びと —

2019・12

大仙市アーカイブズ



花火のまち
大仙市

大仙市「明治150年」シンポジウム報告書の発行にあたり

本報告書は平成30年度に開催した大仙市「明治150年」シンポジウム（全4回）の中から、平成30年8月19日開催の第2回シンポジウム「近代への道 ―戊辰戦争と人びと―」の基調講演及びシンポジウムの発表記録です。

なお、記録をまとめるにあたり、それぞれの発表内容の表記等については、発表者のご承諾を得まして事務局（大仙市アーカイブズ）の責任において、句読点や文言整理など、当日の発表内容の主旨を損なわないように部分的な編集をさせていただいております。

《第2回シンポジウム》

主 催 大 仙 市 / 共 催 秋田大学史学会
開催日時 平成30（2018）年8月19日（日曜日）午後1時30分～午後5時
場 所 大仙市民会館小ホール
基調講演 「戊辰戦争の軍事史」 東京大学史料編纂所 所長 保谷 徹 氏
シンポジウム 「戊辰戦争と人びと ―仙台藩・庄内藩・秋田藩の視点から―」
司 会 渡辺英夫 氏 （秋田大学教育文化学部教授）
パネリスト 栗原伸一郎 氏（東北大学大学院文学研究科学術研究院）
長南伸治 氏 （上山城郷土資料館学芸員）
畑中康博 氏 （秋田県立博物館学芸員）

◆開催趣旨

平成30(2018)年は、明治元(1868)年から満150年を迎える年にあたります。大仙市では近代の歩みをテーマに、市民と共に近代化による地域の変貌を、歴史資料等をとおして振り返り、未来を担う若者に先人の事跡を伝え、これからの大仙市のあり方について、勇気と希望を持った将来像を描いてもらう契機とするため、シンポジウムを開催いたします。

大仙市は平成17(2005)年3月22日、大曲市・神岡町・西仙北町・中仙町・協和町・南外村・仙北町・太田町の8市町村が合併し、新しい行政区画として誕生しました。現在、私達が暮らす自治体は、明治維新以降、財政能力の強化や行政効率の向上を目的として町村の統廃合を繰り返し、明治22(1889)年には市制・町村制が施行され、現在につながる自治体が国家によって形成されたという歴史があります。

現代社会の基礎・根底には、明治維新後の様々な形での近代化が深く影響を及ぼしています。しかし、明治維新から現代までの150年という歳月には、昭和20(1945)年のアジア太平洋戦争での敗戦・終戦というボーダーラインがあることも事実です。このボーダーライン以降、私達の社会の成り立ちは大きく変化しています。それは、大日本帝国臣民から日本国民へ、そして、富国強兵から国民主権による民主化と非軍事化への転換が行われたことです。

大仙市「明治150年」シンポジウム（全4回）は、ふるさとの近代について、昭和20年というボーダーラインを意識し、人びとの考え方とその暮らしの理解を深め、現代に生きる私たちの社会のあり様を考えてみるために開催いたします。

（全4回のシンポジウム配布資料から）

大仙市「明治 150 年」シンポジウム（第2回以外）の概要

《第1回》 ふるさとの近代化を考える ― 1868年～1945年 ―

平成30年7月29日（日） 開催

大曲交流センター 講堂

司 会 柴田知彰 氏 （秋田県公文書館）

パネリスト 中野目 徹 氏 （筑波大学教授）

茶谷十六 氏 （民族芸術研究所）

《第3回》 変貌するふるさと ― 教育・交通・産業 ―

平成30年9月30日（日） 開催

はなび・アム 研修室

司 会 茶谷十六 氏 （民族芸術研究所）

パネリスト 畑中康博 氏 （秋田県立博物館）

榎 良昭 氏 （秋田市立佐竹史料館）

佐藤隆造 氏 （仙北史談会）

《第4回》 1945年 ― 大日本帝国臣民から日本国民へ ―

平成30年10月20日（土） 開催

はなび・アム 研修室

司 会 茶谷十六 氏 （民族芸術研究所）

パネリスト 加藤聖文 氏 （人間文化研究機構国文学研究資料館准教授）

荒川 肇 氏 （秋田近代史研究会）

伊藤寛崇 氏 （秋田工業高等専門学校）

事例発表 高橋邦之 氏 （西仙北中学校教諭）

大仙市「明治150年」事業の実施記録

～ ふるさとの過去と現在 そして未来を考える ～

◆シンポジウム （全4回開催・・・前記のとおり）

◆ヘリテージツアー （3回実施）

7月22日（日） 戊辰戦争の戦跡をめぐる ～ふるさとは戦場となった日

9月27日（木） 近代化もたらしたもの ～鉄道・酒造・煙火・窯業を中心に

10月14日（日） 地主達の残照 ～その邸宅から近代を振り返る

◆企画展示 （3施設で資料紹介展示）

アーカイブズ展示室 5月15日（火） ～12月 1日（火）

（前期：戦争と人びと 後期：ふるさとの近代化と人びと）

旧池田氏庭園米蔵内展示室 6月19日（火） ～11月18日（日）

（前期：池田家の近代 後期：池田家の地域貢献）

花火伝統文化継承資料館「はなび・アム」別館 8月5日（日）～ 9月9日（日）

（花火と人びとの暮らし）

大仙市「明治150年」シンポジウム

平成30年8月19日(日)

午後1時30分

大曲市民会館 小ホール

近代への道程 —戊辰戦争と人びと—

■事務局

本日は大仙市「明治150年」シンポジウム「近代への道程—戊辰戦争と人びと—」にお越しいただき、誠にありがとうございます。ただいまから、大仙市「明治150年」第2回シンポジウム「近代への道程—戊辰戦争と人びと—」を開会いたします。

はじめに、主催者であります大仙市長老松博行が、皆様にご挨拶を申し上げます。

■老松博行 大仙市長

大仙市長の老松博行と申します。今日はようこそお出でいただきました。よろしくお願いいたします。

本日、大仙市「明治150年」シンポジウム「近代への道程—戊辰戦争と人びと—」を開催いたしましたところ、多くの皆様からご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

また、本日は、宮崎県 宮崎市の戸敷市長をはじめ佐土原の「きょうわ会」の皆様からもご参加をいただいております。遠路お越しいただきまして誠にありがとうございます。

今から150年前、市内全域が戊辰戦争の戦場となる中、秋田藩の援軍として佐土原藩士約100名が協和境の戦闘に参戦され、8名の藩士が戦陣に散りました。境(大仙市協和地域)の萬松寺には、住民が建てた供養塔があり、現在も大切に供養がなされており、今朝ほども関係者ととも供養させていただいております。このようなご縁から、宮崎市とは有縁交流都市として、様々な交流をさせていただいております。この場をお借りいたしまして、あらためて厚くお礼を申し上げます。

さて、本日のシンポジウムであります。秋田大学史学会との共催として開催するもので、基調講演とシンポジウムの二部構成となっております。基調講演には、東京大学史料編纂所所長の保谷徹先生をお招きし、ご講演をいただくこととしております。保谷先生は、幕末維新期の政治・外交・社会の歴史を、軍事科学・軍事改革・軍隊あるいは戦争の歴史

という視点からとらえる取組みをされており、また、幕末維新期の画像史料の研究にも取り組まれ、当時、諸外国が日本で撮影した写真資料の発掘にもご尽力をなされております。

本日は、「戊辰戦争の軍事史」と題しまして、戊辰戦争の軍事史的位置づけや、秋田戊辰戦争での戦場の実態につきまして、史料に基づいた貴重なお話をさせていただきます。保谷先生、どうぞよろしくお願いいたします。

本日のテーマにあります「秋田戊辰戦争」ですが、当時、秋田藩の最重要防衛拠点として位置付けられていた本地域は、仙台藩、庄内藩を中心とする奥羽越列藩同盟軍が久保田や角館を目指す路程にあったため大きな戦禍に巻き込まれました。8月13日から9月18日まで戦闘が繰り返され、本市でも角間川・花館・南檜岡・刈和野・峰吉川・福部羅・小種・境・国見地区で大激戦となりました。

仙北地域の池田家に残された史料からは、仙北郡内の家屋5,915軒のうち、焼失家屋は実に1,136軒に及んだと記録されております。また、大仙市内の戦闘での戦死者は、両軍合わせては500名を越えるとされております。今回のシンポジウムでは、仙台藩、庄内藩、秋田藩の視点から、現在、第一線で研究をなされている栗原先生、長南先生、畑中先生をパネリストとしてお招きし、この戊辰戦争につきまして、それぞれのお立場からお話をいただくこととしております。

この度のシンポジウムを通じまして、ふるさとがかつて戦場であったことや、多くの命が失われた史実を知り、現代に生きる私達にとって「戊辰戦争とは何だったのか」ということを、ご参加いただいた皆様と一緒に考える貴重な機会にしたいと考えております。

結びにあたり、本日の「明治150年シンポジウム」が大成功となり、幕末維新期における本市の歩みを知り、未来へ踏み出す一歩を考える有意義な機会になりますことをご祈念申し上げまして、開会の挨拶とさせていただきます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

■事務局

続きまして、本シンポジウムの共催者であります、秋田大学史学会会長渡辺英夫様から、皆様にご挨拶を申し上げます。

■渡辺英夫 秋田大学史学会会長

秋田大学史学会の渡辺でございます。よろしくお願いいたします。皆様お忙しい中、このシンポジウムにご参加くださいまして誠にありがとうございます。秋田大学史学会を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

秋田大学史学会は、地域の歴史研究を担う基幹学会として、例年秋に大会を開催し、不定期ではありますが研究部会を開催して、その研究成果を機関紙「秋大史学」に発表しております。秋大史学はこの春、第64号を刊行し、全国に向けて広く公刊しております。

本学会では、今年、この2018年が戊辰戦争150年の記念の年にあたることから、あの内戦を振り返り、あの戦争が地域社会に与えた影響と、その意味を考えるべく研究を重ね、その成果の一端を広く公開し、市民の皆様と一緒に考える機会を得られないかと考えてまいりました。そうしましたところ、幸いにも東北地方の市町村では初めてとなる公文書館が大仙市に開館され、その大仙市アーカイブズのご協力のもと、大仙市の企画であります明治150年記念事業のひとつとして、本日のシンポジウムを共催させていただき運びとなりました。

本日は秋田県内はもとより、広く東北地方から関連の皆様がご参加くださっていると思います。さらには、遠く九州は宮崎市の市長さんはじめ、佐土原藩ゆかりの皆様がはるばるお越しくださいました。誠にありがとうございます。

戊辰戦争と言いますと、あの戦争があった慶応4年、つまり明治元年が西暦では1868年にあたり、それが当時の暦でいえば、十干、十二支の「つちのえ・たつ」、つまり戊辰（ぼしん）の年にあたることから、そう呼ばれるようになりました。ところが今ではそうしたことさえ、私たちの記憶からは薄れつつあるのではないのでしょうか。そして、150年前にこの地で繰り広げられた戦争が、日本全国の皆さんにはもちろんのこと、残念ながらこの秋田の地に暮らす人々にさえ、だんだんと記憶から遠ざかり忘れ去られようとしています。これは大変残念なことであります。

また、過去を正しく把握し考えない、そういう姿勢は、私たちの将来を考えるうえで、正に危機的な状況だと思います。本日のシンポジウムにより、お集まりの皆様が戊辰戦争の意味をもう一度問い直し、明日への展望につながれば何よりと思います。そして、このシンポジウムを機に、もしかすると皆様の

足元に貴重な史料が残っているかも知れません。新しい歴史資料が発見されるかも知れません。そうした場合には是非、大仙市アーカイブズにご一報ください。それは市民、県民の貴重な財産となり、国民共有の宝物になります。そして、それは私たち研究者だけではなく、地域に暮らす皆様が、自らの手で、自らの過去を解き明かす大きな手がかりになるはずです。

本日のこのシンポジウムが、私たちが今後に向けて大きな一歩を歩みだす、貴重な契機となりますことを祈念して、私からの挨拶といたします。

■事務局

ありがとうございました。続きまして、戊辰戦争が縁となり、現在、有縁交流都市として本市とさまざまな交流をさせていただいております、宮崎市長戸敷正様からご挨拶を賜ります。

■戸敷 正 宮崎市長

ご紹介いただきました、宮崎市長の戸敷でございます。

本日ここに明治150年というシンポジウムが盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。明治150年に関する事業につきましては、全国各地で行われておりますが、ここ秋田県大仙市では、7月から10月まで、毎月行われるシンポジウムや戊辰戦争の戦跡などを巡るヘリテージツアー、さらには企画展示など、多岐にわたる事業が開催をされ、関係者の皆様のご尽力に心から敬意を表する次第でございます。明治の時代に生きた先人たちの思い、足跡を感じながら、皆様とともに思いを馳せたいというように考えております。

さて、戊辰戦争では秋田藩の援軍として駆けつけ、旧協和町で戦死した佐土原藩士8名を手厚く供養いただいているという歴史があり、そのご縁で旧協和町と旧佐土原町の有縁交流が平成4年から始まりしました。その後、両町はそれぞれ、大仙市、宮崎市と合併し、今日に至るまで毎年各種イベントでの相互訪問や中学生の交流を行っておりますが、その対象が主に旧町域に限られてきたところであります。

本市としましては、明治150年というこの節目に、大仙市様とお話をさせていただきながら、両市の絆がますます強まるとともに、相互の繁栄と進展をもたらすことを切に願い、有縁交流事業を本市全

域に拡大し、40万市民あげて盛り上げて参りたいと考えております。

結びに、大仙市様のますますのご発展とご繁栄、及び本日ご出席の皆様のご健勝、ご多幸を祈念いたしまして、ご挨拶といたします。本日は盛会まことにおめでとうございます。

■事務局

ありがとうございました。

続きまして、本日の予定をお知らせいたします。このあと、「戊辰戦争の軍事史」と題しまして、東京大学史料編纂所所長・保谷徹様より基調講演をいただきます。そのあと、10分間の休憩をはさみまして、午後2時50分頃から「戊辰戦争と人びと」というテーマで、シンポジウムを行います。途中、10分間の休憩をはさみます。その際、お渡ししております質問票を係の者が回収いたしますので、ご協力をお願い申し上げます。閉会は午後4時50分を予定しております。

それでは、基調講演に移りたいと存じます。

講師の保谷様をお迎えいたします。会場の皆様、どうぞ盛大な拍手でお迎えください。

講師の保谷様をご紹介します。保谷徹様は、東京都のご出身で、1984年3月に東京大学文学部国史学科を卒業され、86年3月には東京大学大学院人文科学研究科修士課程を修了されております。翌年には東京大学史料編纂所の助教授に着任され、2018年4月からは、同所の所長に就任されております。

本日は、保谷様から、最新の戊辰戦争研究につきまして、お話していただきます。それでは、保谷様、よろしくお願いいたします。

基調講演「戊辰戦争の軍事史」

東京大学史料編纂所 所長 保谷 徹 氏

ご紹介いただきました保谷でございます。よろしくお願いいたします。

レジュメをお配りしておりますが、いろいろな史料を出しておりますので、少しコンパクトに取りまとめながら話を進めたいと思います。こちらの画面（スライド）をご覧くださいながらお話をいたします。昨年、秋田市で同じような講演をござい

ますが、今回は時間も限られていますので、少し視点を変えながらお話をしてみたいと思います。よろしくお願いいたします。

いわゆる王政復古のクーデターがあったのち、慶応3年の12月の末、新政府に参加して権力を維持しようとする徳川慶喜と、その新政府への参加を許さず、これを排除しようとする薩摩藩・長州藩などの討幕派との対立が深まります。この翌年の慶応4年1月3日、上京する1万、または1万5千とも言われる旧幕府軍を約5千の薩長兵が、鳥羽伏見でこれを迎え撃ち、約1年5カ月にわたる内戦、いわゆる戊辰戦争が勃発するわけでございます。

ここでは、軍事史的立場から見た戊辰戦争の全体的な位置づけ、それから兵器、とくに火器力から見た戦場の実態とでもいいですか、そういう諸問題を取り上げて整理をしてみたいと考えています。いわゆる政治史や政局史ではなく、また戦局史でもない、戦争全体を見たときの戦争遂行の仕組みであるとか、軍事体制の変化ということに着目していくわけです。そういうことを戊辰戦争から考えた時に、結論的に申し上げると、いわゆる江戸時代、近世の戦争のあり方が、皆さんも比較的容易に想像ができるような近代的な戦いの仕方にどこかで変わるわけです。

それはどこが一番大きな契機なるのかと考えたときに、やはり戊辰戦争という全国的に展開した戦争の中で決定していくことになるということです。つまり、戊辰戦争によって軍事面での革命的な変化が起きたと考えられるのではないかと、そこにポイントがあるわけです。

今回、特にキーポイントとなる軍事技術の問題ですが、その部分をあまりやると、鉄砲の話ばかりすると言われてしまいそうですが、そういう側面であるとか、当時の国際情勢、あるいは海軍との関係で言いますと蒸気軍艦の使用のされ方等等についても、追々と織り交ぜながら話を進めたいと思います。

まず戦局の初期段階を簡単にご紹介しておきます。お詳しい方はご存じだと思いますが、まず大阪城から旧幕府兵が京都に向けて肅々と進軍する、

そして（スライドを面を指し）実は手前が京都、ここに伏見の町があって、向こうから旧幕府兵がやってくるわけですが、ここで鳥羽伏見の戦いがございます。

概ね戦争の中心は1月3日から6日ぐらいのことで、非常に限られた戦闘空間の中に大軍を送り込み、しかも肅々といけば薩長兵が譲るだろうという当時の旧幕側の油断もございまして、鳥羽伏見の戦いは、

いろいろと戦局の変化があり、慶喜が最終的に開陽艦に乗って江戸に逃げ帰る敗戦となるわけなのですね。

1月7日に慶喜追討令が出されて、一番がまず徳川慶喜。そして次に会津が処罰の対象ということになる。東海道・東山道・北陸道の三方から、東征軍が組織をされて肅々と江戸に向かって進攻するということになります。

この戦争の第1段階は、恭順を示した慶喜が、4月11日、最終的に江戸城を開城するという事で終結します。いわゆる幕府という立場が放棄され、そして江戸を新政府軍が占領する。当時、有力な開港地でありました横浜が4月20日に接收される。そして江戸の上野の山に籠っていた彰義隊が、5月15日上野戦争によって一掃されて、江戸及び江戸周辺の状況を新政府が掌握するというように、ここまでが戊辰戦争第1局面でございます。

続きまして、ここが今日のお話の一番のポイントになるわけですが、ところがこの戦争はここで止まらないわけですね。まず旧幕の歩兵部隊であるとか、いわゆる抗戦派が江戸を脱出し、そして北関東等で新政府軍と衝突をする。とくに大きかったのは、4月19日に大島圭介が率いる、いわゆるフランス伝習隊が宇都宮城を攻め落とします。「おっ出来るじゃないか」というふうに抗戦派を勇気づけるわけですね。

その頃、いわゆる次のターゲットになっていたのは会津藩ですので、会津追討の命令が出ている、そういう中で会津藩と庄内藩が4月10日に同盟を結びます。会津では武備恭順、新政府に恭順するという態度を示しながらも、武装解除はしないぞという態度です。これは当然、新政府は許すことが出来ない、そして戦争の話になっていくということで、ここに戦争の火種が起きてくる訳です。

当時、会津の所領がございました、あるいは旧幕の所領が30万石ほどあるということで、北越地方でまず大規模な戦争が起こります。会津・庄内は恭順しているから良いじゃないか、何とかこれに寛典をお願いしたい、と言う形で諸藩の同盟が結ばれていく、それが最終的に5月の半ばに、列藩同盟として成立してくる、さらに寛典同盟から攻守同盟へというように変化していくなかで、戦いに巻き込まれていく訳ですね。

この北越の戦争、これは一つには、当時、諸外国との約束によって開港することになっていた新潟の港をめぐる起こります。仙台・会津・米沢・庄内

の4藩が、旧幕府に代わって新潟を管理している。そして、そこで外国との取引を行うことになるのである。

実は、この話の中、ずうっと通して開港地の問題は非常に重要な意義を持ってまいります。それは何故かという、当時の新しい武器と弾薬を諸外国から輸入するためには、どうしても開港地を掌握する必要があるということになっていくのです。従って横浜が新政府に接收されてしまうと、次は新潟が非常に大事なポイントとなってくる訳です。

皆様も名前を聞いたことがあるかもしれませんが、武器商人のスネル兄弟、こう言う連中が次々と新潟に武器を持ち込んで、東北諸藩に購入させることになっていきます。そういう意味で、新潟の意義は大きいだろうと思っております。

それから陸路の戦いといましては、何といっても白河口の戦いに非常に長い時間がかかる訳ですね。こちら側から新政府が攻め上がって来る、そして奥羽の入口の白河を巡って攻防戦が行われるということになります。これを一つずつ紹介しますと時間が足りなくなりますので、ざっくりとご紹介いたしますが、非常に大きな転機となったのは、実は海軍力の使用だというふうに考えられます。

6月16日、太平洋側の平潟に蒸気軍艦を出して新政府軍が上陸作戦を行います。それから白河口でも兵力を強化するという事で、この2方向では非常に大きな戦力が、東北地方になだれ込んでくることになります。蒸気軍艦を使用した上陸作戦というのは、実は西郷隆盛がもともと考えていたことであり、一番恐れたのは、東征軍が東海道を進む時に旧幕側が自分たちの持っている蒸気軍艦で途中を襲ったら、新政府の兵力が分断されて大変な目に遭うかもしれないということを西郷は考えていました。

実はそれを裏返して、自分たちが使おうということです。当時は新政府側の艦船は少なかったのですが、それを掻き集めて、こうした作戦をおこなうことになる訳です。このあたりからですね、銚子までの間、ピストン輸送して、約一万の兵力が東北地方に送り込まれることになります。

それから、新潟の方も、7月25日に背後をついて上陸作戦が決行され、あっけなく新潟は陥落します。そして奥羽勢は本国へ引き揚げざるを得ないことになります。そこから先は会津が包囲されて籠城戦になり、9月末に会津が落城するとだいたい東北の戦争が終結していくわけです。

今日お話しするもう一つは、こちら側の秋田戦争

ですね。秋田では早い段階から秋田藩が新政府側について、そして庄内を攻めようとするのですが、ご存じのように庄内兵から逆に反撃を食らって、庄内兵や仙台兵が北上してくる。そして、秋田は新政府側の応援を受けながらも、最終的には久保田城が落城寸前にいたということがございました。ただ、最終的に会津が降伏して、全体として仙台、米沢も降伏する中で、戦争に見切りをつけた庄内勢が引き上げる。そういう中で東北戦争は終結していくわけです。

最後は箱館です。徳川70万石という処分が決まって、実際に向こうへ移っていった。そこまで見届けた榎本武揚の艦隊が、東北諸藩からの要請に応えやってくるのですが、時すでに遅しということで、箱館へ向かって行く。箱館では、いわゆるカッコ付きですけど「蝦夷地共和国」を打ち建て、箱館や蝦夷地を占領して、ここを拠点に最終的に翌年の箱館総攻撃、この箱館戦争によって、この長期にわたった戊辰戦争も終了することになるわけでございます。

その中で、私が注目していますのは、先ほど申し上げたように、この戊辰戦争の過程で、旧来の軍制が一掃されて、当時の19世紀半ばの欧米に倣った軍制が、各藩で体制的に採用されてくる。これはいったいどう言うことなのかということです。結論的に申しあげますと、それを決定づけたのは、一つは小銃の変化だろうと考えております。ここに示しましたのは、1840年代の末に、フランスの陸軍のミニエという人間が、先込め（前装式）のライフル銃を発明します。これを拡張式と呼んでおります。ライフルというのは、銃腔の中に溝が刻んであって、そこに沿って弾が進むとスピンがかかり、非常に射程の長い威力のある弾が発射できる。これ自体はそれより前から知られていたのですが、如何せん先込め（前装式）ですので、口径の小さい弾を入れて、そのライフルに沿わせる工夫はなかなか難しかったわけですね。これをミニエが拡張式弾丸というものを発明いたしました。椎の実型で裾が開いた形の弾丸を入れ、火薬に着火いたしますと、鉛の弾丸の裾がちょうど鉛筆のキャップの後ろのようになっていて、この裾が広がってライフルに接触し、スピンがかかるという原理です。拡張式弾丸と言っていますけど、これによって装填がし易くて、射程も威力も高い先込め（前装式）のライフル銃となります。これが当時の列強の軍隊に採用されるようになります。

こちらは、イギリスの軍隊が使っていた17世紀から19世紀までの制式銃です。この最初のあたりは、実は火縄銃から燧石銃に進化しただけでして、ずっと丸い弾の時代です。丸い弾の鉄砲というのは、射ってもどこに飛んで行くかわからない。我々も火縄銃で実験してみましたけど、だいたい50メートルも離れれば的には当たりません。

イギリス、フランスそのあと日本で言うところのゲベール銃ですね、雷管式に改良されたマスケット銃等が出てきますが、こうした鉄砲は、おおよそ50メートルから100メートルの距離で、密集した部隊から一斉射撃をし、弾幕を張るという戦法に適したものであったわけですね。

ところが、先込め（前装式）であるけどライフル銃、これは弾丸にスピンがかかって射程が800メートルあるいは900メートル、こういう鉄砲が登場しますと、非常に離れた所から敵兵を狙撃できるようになり、いろいろ戦法が変わってまいります。

欧米ではこの後10年程すると、これをさらに後ろ込めに改造しますので、先込めライフル銃から後込めへという進歩があります。それが火器の発展としては非常に評価されることが多いのですが、しかし、例えば兵士の間隔を数メートルあけて、物陰から敵を狙い撃つ、いわゆる散兵方式という新しい戦い方、新しい戦術が次第に取り入れられるようになって、盛んになってくるわけです。この変化が、日本でも非常に大きなこととして取り入れられることになるのですね。

このあたり、お手元の資料に当時の性能比較を入れて置きました。これは、6フィート×20フィートですから非常に的が大きいですね、だいたい小隊の前面部分くらいはどこかに当るだろうというくらいに撃ったとして、実際の丸い弾のマスケット銃、これは日本ではゲベール銃です。それからいわゆるミニエ銃、あるいはイギリスが使っている銃ですとエンフィールド銃、こうした銃器で撃ったときの命中率がどれだけ違うのか、当時の数値として出てきています。

ライフル銃をどこで一番見分けるかと言いますと、これは博物館などで見ていただければわかると思いますが、ライフル銃は遠くを狙い撃つことが出来ますので、ここに照準器が付いています。例えば300メートル400メートル先となれば、ちょっとこれを上げて撃ちます。遠くを狙いますので、照準器が付いている、付いてないかで、だいたいライフル

銃かどうかということがわかります。照準と言っても使い方が違ってきていることかと思えます。

当時の史料、いつもこれで説明していますが、ライフル銃を日本で最初に入手したのは、1860年の遣米使節がアメリカからプレゼントされて持ち帰って来るのです。これを幕府鉄砲方の江川太郎左衛門が模造生産します。だいたい63年ぐらいから、いろんなところでこのライフル銃が使われるようになってきます。

長州藩の兵隊が実際に、66年の第二次長州戦争のときに、大村益次郎の指揮下でライフル銃を使って旧幕府兵を退けた。そのときの様子を加賀藩士が記録を残しています。「長州勢は、押し出し候節は、銃隊は駐足並にて押し来り、発砲の矢頃に至り候えば、太鼓打ち止め、直に散兵と相成り」バァーと散開してですね、「銘々物陰を撰びて、手早く身を隠し、顔ばかり出して砲発致し、匍（ふせ）て進み寄り候由」見ている方は、何だあの戦い方は？となったのですね。「小銃は皆尖丸にて」先の尖ったライフル弾丸ですね。「柵杖を遣い候事なく、巢口より台尻を地に突着して遣い候事なく」、「巢口より玉を入れ、その台尻を地に突着して撃ち出し候故、至極玉込め早く御座候」、口のところから火薬を入れ、弾を入れてですね、その台尻をドンと突くと、弾が下に落ち装填されるのですが、「散兵の働き手早なること各感心仕り居り申し候」というように弾込めが非常に早いことに感心して本国の加賀藩に報告しています。

まあ、このように長州の奇兵隊や諸隊、さらには慶応2年、慶応3年になりますと薩摩、それから同じ頃に幕府の直属軍が、一番早い段階でライフル銃を取り入れただろうと思います。

では施条銃砲、ライフル銃砲の導入と近世・江戸時代の軍制はどういうものだったのだろうかということになりますが、当時の大名家の家老が率いる一つの軍団、備えとも言いますが、こちらの図を見てご紹介いたします。

まず、侍大將がここにいます。その侍大將が率いている一つの備え、軍団がどういう構成なのか、一つのモデルを示したものです。まず、いろんな足軽隊がいるわけですね。当時の武器は弓、これは弓足軽。それから鉄砲、鉄砲足軽。長柄、長槍ですね、長柄足軽。この弓、槍、鉄砲の足軽の直属部隊ですね。それから軍団の主力は何と言っても家臣達が、それぞれに引連れてくる騎馬隊ですね。このそれぞれが、ひとつずつの家になります。

それからもう一つ、これも後で出てきますが、食

料、武器や弾薬を運ぶための小荷駄隊。この小荷駄隊の多くは、その大名家の百姓、農民を動員して、こうした軍需品の輸送にあたらせるわけですね。この家臣たちの各家から出される、この戦闘ユニットがどうなっているのかというと、まず主人と武士がいますね。それ以外に実はいろんなものがありまして、これが、それぞれの大名家の規則によって決まっているわけで、果たすべき軍役の基準があるわけです。

例えば、これは高200石クラスということで、まず主人と武士がいます。それからいろんな荷物を運ぶための小荷駄、これは甲冑を運ぶ、あるいは槍持ちがいたりとか、主人は絶対そういう物を持たないわけですね。甲冑持ちがいたりもする。それに戦闘に加わりますが、若党もいたりして、それに主人は勝手に馬に乗れませんから、馬の口取りがいるとか、そう言う連中がみんなゾロゾロくっついてくるわけです。これをきちんと動員するための基準が、それぞれの大名家の家中軍役として基準が定められています。戦争が起きれば、こういう人たちを動員して戦争に加わるのが、江戸時代の軍隊の組織のされ方だった訳ですね。

今申し上げたように近世の軍制では、侍大將がいて、一つの備えは、弓、長柄、鉄砲の足軽部隊、それから騎馬部隊、これは馬に乗った主人、主人の格が高いと若党も馬に乗ったりもするのですが、とにかく主人と従者、それから百姓を動員した小荷駄隊、こういうような要素があったわけです。

戦闘時には、戦闘距離に応じて、最初に鉄砲を撃ってバァーンと仕掛けて、次に弓を放ち、そして段々距離が詰まってくると長柄の部隊が出て、いわゆる足軽同士の合戦が始まる。最終的に近世の戦闘手法によれば、騎馬武者の戦闘ユニットが出て、今度は手槍、槍です。その手槍による白兵戦で決着をつけるという戦い方が行われたいたのです。

このように小銃、当時は火縄銃ですので、まだ弓とか、槍とか、そういう物との共存ができた訳です。ところがその小銃が一気に数百メートルの射程を持つ、そうした小銃ができたことによって、今までの戦い方は意味のないものとなってくるわけです。軍事的ないわゆるリアリズムの観点から言えば、それまで併用されてきた、弓、槍などの共生が成り立たない。そうなりますと近世の軍隊編成を大きく変えなければならないことになります。ここから先はザーッとご紹介いたします。

幕末の軍制改革がどういう形で進むのかというこ

とでございます。まずペリーがやって来まして、いよいよ本格的な改革が始まるわけで、概ね安政期、1850年代半ばに軍制改革が全国的に展開いたします。ここでは、何らかの形で多くの藩が高島流、西洋流の砲術を導入します。これは、だいたい足軽部隊にゲベール銃を持たせることになります。ところがこのゲベール銃というのは、先ほどから申し上げているように、丸い弾、施条のない前装式の鉄砲なので、当時の武家たちの感覚から言えば、火縄銃と実は変わらないわけですね。口径が少し大きくなったりはするものの、それまでの弓、槍との、まだ共生が出来るんじゃないかということで、武士たちの戦闘意識を変えるには至らないのが、この安政期の段階だったろうと考えます。

先ほど申し上げたように、1860年代に入りまして、欧米から最新の普及型の先込めのライフル銃が入ってくるようになりますと、事態は一変することになります。ちなみにこのスライド写真が江川太郎左衛門のところで模造した鉄砲、ライフル銃で、現在も東京多摩の地域に残っているものです。

1860年代以降、幕府が全国的なモデルとなる改革を幾つか行います。その一つが文久改革です。文久改革ではこのライフル銃の配備を前提として、それまでの軍隊組織の外側に三兵隊、いわゆる歩兵、騎兵、砲兵隊を創設し、そうした銃卒の供給のために、旗本の領地から百姓を銃卒として徴発します。

さらに長州戦争が始まりますと、幕府の直轄地、つまり代官地からも石高に応じて、百姓を兵賦として徴発するということが行われています。だいたい千石に一人というかたちで取り立てて、そして幕府の歩兵として組織させます。歩兵として勤めているうちは、脇差を差して、いわゆる武家奉公人格のかたちで、一時的に百姓身分を変更して使用することになります。これが文久改革です。

幕府はこれと同時に諸大名に対して、欧米並みの軍事力の強化ということで、銃砲の輸入を奨励し、長崎、横浜で新式の小銃あるいは野戦砲、これを盛んに輸入させます。その結果として、戊辰戦争期までに、概ね数十万丁のライフル銃砲が日本に入ってきたと言われてます。

ゲベール銃については、火縄銃はもちろんですが、ゲベール銃もなんとか国内で生産されるようになりますが、ライフル銃のほうはなかなか国内で大量生産するということは出来なくて、概ね輸入に頼ることですね。したがって先ほど申し上げたように、この輸入のための貿易港を誰が掌握して、その

港から新式の銃砲をどういうふう to 獲得するのかわけ、というのが、非常に大きな問題になってくるわけですね。

それから幕府の改革で申し上げますと、慶応年間の1865年、66年この時期になりますと、いわゆる幕府直属の旗本が動員する兵員、戦争のときにこれだけの武器と人員を動員しなさいと決められた、その銃卒たちそのものが金納化されて、いわゆる歩兵、銃兵ですね、これを一括して幕府が引受けることになる。人宿（ひとやど）のようないわゆる人材斡旋業のような存在から直接に抱え入れる。この結果、先ほど出てきたような騎馬武者の主人と従者という関係が解体されて、軍隊は身分的には一律の兵卒からなる、いわゆる銃隊に再編されてゆく。こういう非常にラジカルな改革を幕府は行うわけです。

同じようなことは、実は幕府軍と対抗して戦争を行わなければいけなかった長州藩でも、慶応2（1866）年にそういうことを大村益次郎の指導のもとに行って、最終盤には幕府と対抗していわゆる討幕運動を起こします。戦争を前提に討幕を目指す薩摩藩、これもそのために藩内のいろいろな意見を抑えて、すべてのこうした藩内の軍役基準を、銃隊編成にする改革を起こすわけですね。ところが、全国的な軍制として幕府が大名を動員するときにですね、すべてこうした形で戦争動員する仕組みが出来たかと言えば、実は出来ない。自分のところの直属の旗本・御家人、自分の直属部隊については非常にラジカルな改革は出来るのですが、すでに幕末の幕府の状態ですと、各大名家に対して、それを強要することは出来ないわけです。

欧米列強に対して、全国的な統一軍制をどうやって作るのか、問題は大名軍役の改定なのですが、幕府はこの大名軍役を洋式、いわゆる銃隊であるとか、大砲隊であるとか、こうすることが漸行できなかった。統一軍制の確立、全国的な軍事改革をどこがどういうふう to 出来るだろうか、戊辰戦争で問われたのはここではないかと考えています。

当時の調練の様子などが示されています。当時、江川太郎左衛門と並びまして下曽根信敦などがいます。これは当時の西洋式の砲術のリーダーに当る方ですけれども、幕府の旗本です。秋田藩はこの下曽根について洋式の調練を学んでいます。これは安政期の調練の様子で、各大名家の部隊が、こうやって集団で集まって、そして、ここでバターンと、ゲベール銃を用いて砲発する調練を行っています。安政期の調練の様子です。

これも洋式銃を持って調練をしていることになるのですが、今日強調したいのは、同じように洋式銃と言っても、実はこれは火縄銃と同じ段階の銃であり、この後1850年代、60年代にかけてヨーロッパでは盛んに普及するライフル銃砲、これがあまり時間を空けずに日本に入ってくる。それをどうやって取り入れるのかということが、当時の大きな問題だったのだらうと考えます。いわゆる素通しのマスケット銃の時代から、ライフル銃段階の時代にいかに付いていくのか、ここに日本の幕末があったんですね。

こちらは大砲です。大砲も同じように拡張式の砲弾の大砲がございまして、これは先込めなんですけど、撃つとここ（砲弾のベルト部分）が広がって、このライフルに当たるといふ、これをメリケンライフルと戦争の中で言われています。

最幕末、慶応3（1867）年の三兵調練では、これは双六絵になりますが、こんな形で兵を展開させて、そして調練する。これはフランス式の調練の様子になりますが、こんなことが盛んに行われるようになって、丸い弾から先の尖ったライフル銃へと、いかに早くその段階の戦術に対応する軍制、軍隊の編成を取り入れるのかということが、実はこの後の戊辰戦争の勝敗を分けることになります。ここで、新旧勢力の軍事動員ということを簡単にご説明したいと思います。

鳥羽伏見の戦いの直後、徳川慶喜の追討命令が出されます。薩摩、長州は既にライフル段階の軍事改革を成し遂げています。そこら辺の連中、いわゆる軍事改革派が新政府の軍隊のヘゲモニーを握っている。そして次の史料のように、「一つ、銃隊・砲隊の外、用捨の事」と命じています。これは、慶喜追討の征東軍には銃隊・砲隊以外はいらないですよということですが、そんなやさしいことではなく、つまり銃隊、砲隊以外は連れてくるなということですね。

さらに「隊長・司令・輜重掛り等、実地要務の外、冗官用捨の事」、いらない人間は連れてくるなということです。いらない人間とは、主人の身の回りするそれこそ草履とか、槍持ちとかですね、そんな者は全部いらない、連れてくるな。中でも一番いらないのは主人だということですけれども。それから「無用の衣類・雑具類持参用捨の事」、いらないものは持ってくるなというわけですね。新政府は、小銃隊あるいは大砲隊（野戦砲隊）以外は一切連れてくるな、もちろん必要な輜重関係、軍事物資を輸送するための要員以外を連れてくるなということを厳命します。

これに対しまして、旧幕府側は最初のうちは武備恭順策をとりますので、江戸城から命令を出してですね、譜代大名に対して「来るんだったら槍隊でしようか、剣隊でしようか」あるいは「和流でしようか、西洋流でしようか」と言っています。ですので、最終盤に内戦になり戦争になるという状態においても、旧幕府側はそこまで徹底して軍事的な要請が出来なかったということがわかります。

新政府から動員された諸藩はですね、それまで旧態依然たる軍役体制で進めてきたところが多かったのですが、新政府から断固として銃隊・砲隊以外は不要と言われてしまった以上、そうした形に軍隊を編成し直して、味方に参じるしかないわけです。

例えば、幾つかの藩が「槍隊を出していいでしょうか？」と問いますが、新政府は「ダメ」というわけです。「それでは役に立たない。」と、それでは貢献したことにならないことになりますので、まさに藩の存亡をかけて、こうした改革に乗り出さなければいけない。これが当時の状況でした。

東北諸藩につきましては、後ほどそれぞれの専門の方からご紹介があると思いますが、慶応年間末にこうした銃隊に切り替える改革に動き出すのが、庄内藩あるいは米沢藩等々でございます。そうした最新の部隊が一部ありながらも全体として制度を変えられなかった仙台藩、あるいは秋田藩等々は、この戦争の中で銃隊化を進めるというふうになります。まあ条件はまちまちだということです。ただいずれにしても、横浜、新潟、箱館等々、当時の開港地での銃砲の輸入に必死になって取組むことに間違いはありません。そして、こうした新しい武器を活かすための軍隊、そうしたものをどのように取り込むことが出来たのか、これが勝敗を分けることになったということでございます。

では、東北戦争の実態を最終盤の秋田戦争について、少しご紹介しておきます。ザッと年表に動きを書いてございますが、新政府がですね、これは秋田がどっちについてということもあるでしょうが、非常に速い展開です。まず問題になるのは、慶喜追討令が出て、そして会津の追討令が出てという中で、従来の将軍、徳川家との主従関係を断ち切って、天皇政権による新たな君臣関係に結び直すということが非常に大きな課題となってきます。

新政府は触頭という24藩をまず指名し、そのなかに秋田藩と仙台藩が入ります。出羽一國、十数藩の触頭として秋田藩はその一つとして指名を受けます。秋田藩はそういう位置づけだったのですね。そ

して最初に庄内の追討令が出ますので、それに従って一旦、出兵をするのですが、ところが奥羽列藩同盟が成立をします。

これは、なんとか会津、庄内の寛典をお願いしようよということになりますが、それが実際には新政府の側との戦闘になり、攻守同盟へと切替わっていくというような形をとります。そのなかで、ご存じのように7月の初めに、秋田藩は同盟を離脱することになります。そして、もう一度、庄内藩を追討するために軍隊を出すのですが、ところが前に申し上げたように、庄内藩は前年の段階で銃隊化に切替えたのです。庄内藩は新徴組を率いて、江戸の治安維持を先頭になってやっています。そして、薩摩藩の藩邸焼打ち事件と言われる、実際には戦さですね、幕府はそこから仕掛けるつもりだったろうと思いますが、庄内藩はそうした修羅場を潜り抜けて来たり、幕府から歩兵隊の一部を譲り受けてもいます。それは、相対的にはわずかな違いだと思いますが、訓練を積んだ庄内軍を中核とする同盟軍に、秋田藩は次々と敗北を重ねて、秋田の南部をほとんど失い、久保田城の近くまで攻め込まれてしまうことになるわけです。

このあたりにつきましては、このようなスライドがございまして、庄内軍自体は、だいたい四つの大隊を組織しています。従来の武士たちに加えて、農兵・町兵を組織した四大隊、だいたい2,000人ぐらい。これを二手に分けて、攻め込んでくる秋田兵に反撃し次々と奪い返して、諸藩を攻め落としながら秋田領へ迫ってくるわけですね。大曲は8月23日ですか、実際にはもっと前の十何日ぐらいから、このあたりが占拠されます。そういうような戦争の経過をたどることになります。

秋田藩の軍制改革については、私も必ずしも詳しいわけではありませんけど、先ほど申し上げましたように、幕臣下曾根信敦に付いて西洋砲術を学んでいます。これは古い型です。慶応年間に砲術館が開設されまして西洋流砲術が奨励され、足軽隊に銃隊化が命じられますが、全体としては家中軍役の基準を、すべて銃隊に切替える形にはなっていなかったのではないかと考えられます。戊辰戦争では、どうも旧式の近世的な軍団が出兵しているようでございます。

このあと何回か新政府の総督府から、「これは銃隊化しなければならないんじゃないか」、それから冗兵、いわゆる無用の従者を淘汰して、そうした連中を連れて来ないようにしなければだめだと言われている

ことから、そのあたりのことを伺うことが出来ます。

お手元のレジュメ、史料の4から6のあたりに、庄内に向けて出兵した秋田兵を観察した記録とそれに関した史料がございます。ちょっと見てみますと、秋田兵は、「銘々陣羽織を着、あるいは槍持参、侍五人へ一人の伴召し連れ」、伴を連れているのですね。それから次がすごいところですが、これは多分秋田の町人の観察の記録だと思いますが、「着替え、布団ひとつ宛て持参」とある。これは着替え、布団を持って出兵するという、なかなか現代的な軍隊では出来ないことが記録に残っています。

それから7月3日ぐらいですと、ほぼ戦争が盛んに行われているでしょうから、こういう史料もございます。「これまでのとおり槍隊にては、ご不安堵に思召され候につき」。これまでのとおりの槍隊ではだめだと。「残り無く銃隊に成し置かれ候」、だから槍隊をすべて銃隊にしなければいけないという議論をこのあたりでしていることが史料でわかります。さらに、総督府から7月28日になって言われたことですが、「戦士ほか無用の従卒等、夥しく召し連れ候やに相聞こえ、早々出張先へ無用の者は引き取り候よう申し達すべし」というようなことが史料に残っておりまして、このあたりなかなか難しいのですが、秋田藩で実際に出てきた軍隊の様子が記録されているわけがございます。

史料の7を見ましても、実際の戦争のやり方としては、夜襲をして、敵地に放火をして、それから槍を入れていく作戦などが記載されていますし、史料の8などを見ると火縄銃の火縄に気を付けることなどを言っていますので、火縄銃も使われている、おそらく新しい武器を使いつつも、こうした古い銃器も併用して使われている様子が読み取れるのではないかと思います。

秋田藩の軍制改革は、秋田戦争遂行の中で進行する事になるのだろうと考えます。最終的には、お手元の資料の中にあるように9月段階になっても、藩から家臣たちに対してライフル銃の貸与だとか、あるいはいろんな改革が申し渡されているようですから、本当に戦争の最終盤になって徐々に形が整ってくると、そういうようなことになるようですね。先ほども申し上げましたが、秋田藩を追い詰めた庄内藩兵については、非常に早い段階からライフル銃を配備した西洋式の部隊でした。

実はここから先はもう一つの話となりますが、秋田には新政府側の応援兵力があったはずなのに、何故十分な対抗が出来なかったのか。ここで兵站と輜

重、いろいろな戦争遂行の諸装置の問題を考えなければいけないと考えています。

戦争というのは、実は戦闘員だけの問題だけではないのです。兵員の移動や、あるいはこれに伴っての宿泊や食事、兵站ですけれども、それをどうするのか。ロボットじゃないので、ちゃんと食事しなければならない。休み、休泊をとらなきゃならない。それから兵糧の手配、運送、武器弾薬など軍事武装の輸送など先ほどから申し上げている輜重、これは大きな問題なわけです。軍隊には戦闘員とほぼ同数、あるいはそれ以上の軍夫といわれる輸送部隊に人員が必要であり、これは村々から徴発されていくわけです。

例えば戊辰戦争の時には断片的なデータしかないのですが、10年後に鹿児島、南九州で戦われました1877年の西南戦争、この時はどうかというと、かなり数字がわかります。このときの政府側の兵士が約6万人に対して、政府側が雇った軍夫が一日平均約7万人です。6万人の戦闘員に対して7万人の軍夫が必要とされた訳ですね。軍夫は延べで2035万人がこの西南戦争で使役され、西南戦争の戦費の31パーセントは、軍夫に対する給金です。戊辰戦争の兵力がざっくりと11万人、実際に戦争に参加したのは7、8万人だろうと思うんですけど、これに匹敵するだけの軍夫がいなければ戦争が動かないわけです。つまり、野戦砲を運ぶ人間がいなければ、銃弾を運ぶ人間がいなければ、あるいは兵糧を運ぶ人間がいなければ、戦争が前に進まないのです。実際に白河口で中々、新政府側が進撃できなかったのは、このあたり軍夫の不足ということがあったのだと思います。

実は、同じようにこの秋田の戦線でも、次の史料に応援に来た長州藩兵が、人足、軍夫が来ないじゃないかと怒ってこんな文句を言っていますね。「兼ねて備え置き申さず候ては、軍さ（いくさ）相ならず候ゆえ、ぜひ、手配いたすべき段、嚴重の談判に候えども」。軍夫がいらないから戦争ができないというわけですね。「岩瀬向き諸村は多分賊地と相なり、詰め夫来たらず」。しょうがないですね、だって向こうに取られちゃったから、村々から陣夫が来ないというわけです。この岩瀬というのは、ここより北方なんです。当地はすでに盛岡藩が参戦して、そちらと対応しなければならないという中ですね、戦場となってしまったので、そこからは陣夫（軍夫）が来ない。秋田の南半分はすでに庄内勢の手に落ちているので、そこからも陣夫が来ない。ということで戦争

をしようにも、こうした陣夫、軍夫の動員が出来ないので戦争が遂行出来ないという状態に陥っている事なのだろうと思います。

ちなみに次のところは、小荷駄というのはこうあるべきだと、おそらく、長州兵が言ってるんですね。「兵糧は握り飯にて箱に入れて持ってこい。味噌、香の物、肴はニシンの塩煮、塩鱒等なり。ただし、肴は日に二度なり。それから夜食は酒を一人に付き二合」。これは恐らく長州兵の要求なのだろうと思いますけど、これはちょっと過大な要求です。毎晩酒を二合ずつ飲ませろなんてね。いずれにしる、軍夫がないことには戦争が進まないということが、ここでも指摘をされています。

そして、戦場で兵器以外で最も大事なものは、兵糧とワラジだと。ワラジは二足ちゃんと腰につけろ。兵糧は場合によっては腰兵糧で一日分をつけろ。「小荷駄は篤実の君子勤むべし。軽薄の小人勤るときは軍（いくさ）必ず誤るべし」と指摘しています。こうした物資の輸送はきちんと出来る人がやらなきゃならない、ということもここでも指摘している訳ですね。

さてもう一つ、秋田戦争にみる戦場のありさまを少しご紹介して参ります。この実際の戦場では、一番近代的な武器が先駆的に使用された、ある意味では近代戦争の始まりです。後になって塹壕を掘ってそこから小銃で狙撃し、さらに突撃するかたちの戦い方になっていく走りなんだなというところです。ところが戦争の慣行としては、江戸時代的な、あるいは戦国時代的な慣行で行われた最後の機会でもありました。

銃砲戦はですね、とにかく敵が見えると直ぐに撃ってしまう、当時のライフル銃の射程性能がゆうに500メートルを超えるようになっていますので、5町、550メートル離れた所でも撃ってしまいます。これはほとんど当たりませんが、そういうふうな戦争の仕方が行われていて、大量の弾薬を消費することになります。この弾薬は、先込めのライフル銃の場合には、ほとんどが自分達で調達ができるのですが、後込めのライフル銃になってしまうと、カートリッジ化されますので、これは輸入に頼らざるを得ないありようになってまいります。

それからもう一つ、これは近世的な戦争慣行ということで、首捕り、生捕り、分捕りと書きましたけど、これは戦争が終わるとですね、届書きが出ます。こちらは新政府軍の彦根藩井伊家の届書きですけど、現物が私どもの研究所にございます。見ていき

ますと「首一つ、首三つ、生捕一人、右討ち取りの分」と書いてあるのですね。それから大砲とか弾薬とか分捕り分ですけども、これもちょうど書いてあります。首を捕って、そしてこれは仙台藩の何某だとわかったというわけですね。でこっちは誰々とか。

戦闘方式は、完全に銃砲戦に移っていくのですが、戦争が一段落すると、討取ったあとに敵兵の首を捕りにいくのですね。いわゆる首捕りが行われる。そして首実検ですね。首を晒して勝利を鼓舞することも行われました。生きたまま捕まえると生捕りですが、おおかたこうした人々はそのまま切り殺されてしまう。こうした戦争のありようというものがしばらく続くということになります。

そして、村の人びととの関係で申し上げると、軍夫狩りと放火、先ほどから幾つかお話が出ていますが、これが村々の民衆が最も恐れたことになります。放火はある種の戦闘行為でございまして、指図があれば放火をする。ただし、指図がなくやる場合には火付け同様の罪になるということです。

例えば、列藩同盟の中でも発令しておりますが、火付けは戦争の一つの手段です。相手に味方した村々は用捨なく火をかけられますし、あるいは夜襲のときに松明代わりに燃したりとか、敵の根拠地を奪うたびに火をかけるということが行われますので、これが村々に対しての最も大きな被害となったわけです。戦火が近づきますと、村人たちは家財道具はおろか、いろんなものを外して隠す、そして山野に隠れるということになります。新政府側、同盟側を問わずに、こうした形は行われています。

それから先ほどから申し上げているように、軍夫の徴発ということ。これも新政府、同盟軍問わず、高い給金を用意して軍夫を募るのですが、実際はそれによって戦場に進んで出てくる者はいない。民衆を軍夫として徴発する、市中の若者やそのへんをウロウロしている者を見かけるとですね、みんな槍や刀を振り回して脅し、そして強制的に徴発するということが行われます。こうした現地での民衆徴発というもの、近世的な戦争の慣行だったと考えています。

史料の12、これは庄内兵の記録に書かれていますが、関係する部分を読んでみます。「老若婦女はみな山野に逃れ、夜になっても帰ってこない。かつ、家財・雑具・戸・障子にいたるまで、みな山野に隠した。非常に無残なありさまだ」というわけですね。それから次のところですが、川ノ目（大曲南部）というところがあるのですかね、「残らず空き家だ」、

これは庄内藩の記録ですが、庄内兵が進軍して来ると家々の敷板がない。のし板もない。人がひとりもない。ようやく見つけたら川端の葦、萱の中に小屋掛けをして潜んでいる。そこで家ごと鍋釜を出させて、手当を与えて敷板を敷かせ、安堵するように命じた。こういうときに、場合によっては年貢半減みたいな話を持ちだし、人々、村々の支持を得て、最終的に彼らを軍夫として道案内など、そういうものに使ってですね、進軍していくことになるわけですね。こうした戦場の実態、近世的な慣行というものに着目していきたいということで史料の12に幾つか資料を引いてございます。

お時間になってしまいましたが、最後の史料はですね、だいたい当時100名とか150名とかという単位で部隊が移動して行くので、合言葉を決めるのですが、このようなこともあったという紹介となります。向こうから兵隊が近づいてくる、味方だと思って進んでいったところ、向こうも味方だと思ってずいぶん近づいてしまったところ、「オッ、敵じゃないか」ということになってますが、すでに最初に進んで行った人間、兵士同士が会釈をして「おはようございます」と向こうに言葉をかけてしまい、相手も敵だとわかり、互いにワッと逃げるみたいな、そういうリアルなやり取りなども、この庄内兵の記録の中に含まれてございます。

駆け足で本当に申し訳なかったのですが、この戊辰戦争の軍事的な意義として、ひとつは大名軍役の動員基準として、ライフル段階の洋式軍制が位置づけられたことで、新政府はこの戦争を実行する中で、その大変革を一気にやりおおせたということになるのだと思います。諸大名の側から見ると、この戦争遂行の中で否応なく、この洋式の軍制を受け容れざるを得なくなった。そしてこの戦争遂行体制の構築は、新しい軍制を取り入れるだけではなく、民衆徴発を前提とした戦闘員、銃兵に仕立てた徴発、あるいは非戦闘員を輜重部隊の軍夫に仕立てるなど、こういう事がその中で出てくる。

こうした諸藩に対する新しいやり方を迫ってくる戦争ですが、この結果として、いわゆる軍事的集中が成し遂げられてゆくということで、実はこのあとの版籍奉還、そして廃藩置県、そういう中で国内の政治体制全体が集権化していきます。その一つの切り口として、この軍事集中の問題が登場してくるということを最後に取りまとめて、お話をさせていただきました。

以上この東北戦争を通じてですね、この戦争の中

で地域の村々や民衆が、戦争遂行体制の中に、どう組み込まれていったのか、あるいは戦場の中で、どういった被害を受けたのか、近世的な諸慣行の中で、どういう形で民衆が取り扱われていったのか、さらに民衆側がどう対応していったのかなどについて、今後とも注目していきたいと考えてございます。

限られた時間の中で、端折りながらの報告となりましたが、どうもご清聴ありがとうございました。

■事務局

保谷様、貴重なお話、誠にありがとうございます。保谷様をご降壇されます。会場の皆様、今一度盛大な拍手をお願いいたします。

ここで、10分間の休憩をはさみたいと存じます。

《休憩》

シンポジウム

「戊辰戦争と人びと 一仙台藩・庄内藩・
秋田藩の視点から」

■事務局

それでは、シンポジウムに移りたいと存じます。はじめに、司会及びパネリストの皆様をご紹介します。

本日の司会は、秋田大学教授 渡辺英夫様です。続きまして、パネリストの皆様をご紹介します。

はじめに、東北大学大学院文学研究科学術研究員 栗原伸一郎様です。次に、上山城郷土資料館学芸員 長南伸治様です。次に、秋田県立博物館学芸員 畑中康博様です。以上で、皆様の紹介を終わります。

それでは、司会の渡辺様、よろしくお願いいたします。

■司会（渡辺英夫・秋田大学教授）

それでは皆様よろしくお願いいたします。パネラーの3人の皆様には、一人20分という限られた時間でご報告をお願いしたいと考えております。

なお、今日のシンポジウムに先立ちまして、私たち秋田大学史学会では事前の研究会を開いて勉強会を重ねてまいりました。これから聞いていただければわかりますように、3人の先生方それぞれに視点

が違い、異なる観点から研究を進められておられますので、そのへんのところを皆さんまずご理解いただいて、ぜひ、そうした色々な観点からお聞きいただければと思います。

秋田藩側からは、秋田県立博物館の畑中先生に、そしてこの秋田藩領になぜ攻め込んできたのか、列藩同盟側を代表するかたちで、仙台藩と庄内藩から、それぞれ栗原先生と長南先生に来ていただいております。それでは、先生方どうかよろしくお願いいたします。

■栗原伸一郎（東北大学大学院文学研究科学術研究員）

仙台から参りました栗原でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は仙台藩の視点からということで、仙台藩あるいは奥羽越列藩同盟から見ました秋田戦争に至る経緯や情報といったものを確認した上で、実際に秋田戦争には仙台藩のこういった部隊が出兵しているのか、あるいはどういう指示系統であったのかなどについて、お話をさせていただきます。

まず前提としまして、仙台藩はどういう藩なのか説明させていただきます。仙台藩と言いますのは、石高から見ますと約62万石でございます。これは全国3位で非常に大きい訳ですね。また、江戸城の席次は大広間席という所になっておりまして、非常に家格が高いのです。一国すべて、あるいはその大部分を有する大名は国持大名などと言われますが、伊達家もその一つになります。

国持大名とか大広間席と言いますのは、秋田藩佐竹家と同格ということになります。保谷先生のほうから仙台藩と秋田藩は触頭に任命されたというお話がありましたけれども、格の高い大名だということが、この辺からも分かってくるかと思います。

仙台藩は家格が高いということで、自意識が非常に高いんですね。仙台藩は自分自身のことをどのように認識しているかと言いますと、まず全国屈指の大藩であると考えております。自分たちは外様の御三家だと言っています。ちなみに、あとの二つは薩摩藩と加賀藩です。全国規模で見ましても大きな藩であるというわけです。

また、奥羽で見ますと一番大きな藩になります。そのため、仙台藩は奥羽の主導者であるという認識を持っておりまして、自分のことを鎮守府將軍であるなどとも言っております。見方を変えますと、非

常に地域を重視しているとも言えますね。こうした意識が、奥羽列藩同盟を結成し、主導していく背景になります。

仙台藩の体制ですけれども、非常に大きな藩ですので、藩士も多いんですね。家臣数ですが直臣約1万人、陪臣約24,000人で、地方知行制をとっております。家臣団の家格ですが、こちらに書いたように、かなり細々と分けられております。一番家格が高いのが一門になりますけど、一門だけでも11家、知行約14万石で陪臣が約9,000人もおります。

職制としましては、ほかの藩での家老にあたりますが、仙台藩では奉行と言いまして、奉行を補佐するのが若年寄という役職になります。

軍隊編制ですと、大番組というものを作っています。これは召出・平士の家格の藩士を中心に編制されておまして、10組約3,300人になっております。従いまして、仙台藩が戦争に出るときには、大番組の直臣部隊と、例えば一門だとか、そういった大身給人の陪臣部隊との混成軍になります。また、戊辰戦争では、猟師の部隊を編制したり、農兵が動員されるということがありました。

次に、列藩同盟の結成と戦争に至る経緯を確認してまいりたいと思います。

戊辰戦争の始まる前の年、慶応3年ですね、仙台藩は京都で活発に動いておりました。仙台藩というのは、薩摩藩に対して対抗意識を強く持っておりまして、その中で、全国的、地域的な連携を図って行くというような活動をしておりました。

戊辰戦争が始まり、会津藩が朝敵ということにされます。そうしますと仙台藩は、討幕は不可である、要は戦争はやってはいけないというような建白書をつくるんですね。このときに仙台藩は秋田藩も含めた奥羽の有力藩に協力を要請します。ところが秋田藩は違う考え方を持っておりまして、討幕の方向に進む、つまり兵を出す方向に動いて行くということになります。

その後、仙台藩は何とか会津攻めを避けたいということで、水面下で様々な活動をいたしまして、結果、閏4月になりますが、仙台藩と米沢藩主導で仙台藩領の白石に奥羽諸藩の代表を集めて、会議を開きます。このときに、会津救済を話し合い、奥羽諸藩の意見を集約して鎮撫総督に嘆願をする訳ですね。

ところが嘆願は却下されてしまう。それをうけまして奥羽諸藩は、会津攻めの軍隊である討会軍、庄内攻めの軍隊である討庄軍を解散することにします。

ちなみに仙台藩と米沢藩というのは、同盟の結成前から秋田藩のことを警戒しているという面もございました。

その後、奥羽諸藩は盟約を結び、奥羽列藩同盟をつくりました。後に越後諸藩も加わってまいりますので、奥羽越列藩同盟と呼ばれることもございます。

列藩同盟と言いますのは、何も朝廷と全面戦争しようとか、そういうことを考えていたわけではないのです。むしろ朝廷とのつながりを重視し、鎮撫総督府の下に同盟を作ろうというようなスローガンを持っているんですね。つまり、新政府と全面対決をするのではなくて、鎮撫総督府、朝廷をとり巻いている薩長が悪いんだというような論法になります。

そして、列藩同盟は自分の行動を正当化していくことになります。その過程で新庄にいる副総督の沢為量の確保を図ります。沢は薩長兵と一緒におりますので、その分離を図るということですね。秋田藩に対しても沢を藩内に入れさせないように求めていくことになります。

列藩同盟側としましては、鎮撫総督府から嘆願を却下されておりますので、京都の太政官に建白を出す、あるいはその過程で有力諸藩に協力を求めようと考えておりました。主眼としましては、とにかく会津藩・庄内藩との戦争を中止するよう訴えて、薩長を政治的、軍事的に追い込むという戦略を持っておりました。これは主に仙台藩・米沢藩の戦略です。

ただ、結局のところ、奥羽諸藩は、藩によって思惑がちっと違うんですね。どのように違うのかと申しますと、大義名分というものを重視して、向こうから仕掛けられたら戦うというようなことを考えている藩もございますし、あるいは、むしろそれよりは、こちらの方から積極的に行くという藩もございました。仙台藩はこちらの積極的な立場です。

また、そもそも新政府軍とは戦争をやりたくないと考えている藩もございました。つまり、会津藩との戦争は止めてほしいと嘆願は出すけど、新政府軍とは戦いたくない。秋田藩などはこの立場になりますね。様々な思惑を抱きながら列藩同盟は結成されていくことになります。

さて、5月になりますと沢為量と薩長兵は秋田領に逃げて行きました。これに対応するために仙台藩は、大番組と給人の部隊を秋田領の南、新庄の方に派遣することになります。秋田藩からは仙台藩に対して部隊を撤退してほしいという要求もなされますが、その後、列藩同盟は秋田と盛岡の2つの藩の動向がよく分からない、不審があるということで使節

を派遣することに決めました。

実際に使節を派遣すると、7月4日に秋田藩が仙台藩の使節を殺害してしまい、秋田藩はここで同盟を離脱することになり、新政府側につくことになります。そして新政府軍が南に攻め込むこととなります。院内の方から新庄領に軍勢を派遣するということですね。このときに新庄藩も同盟を離脱いたします。その過程で当然、戦いも起きて、仙台藩は大敗北をする訳ですね。大番頭が戦死するなどということもありました。

では同盟の中で、秋田藩をめぐる情報がどのように共有されていたのかということですが、例えば秋田藩主が鎮撫総督の九条道孝に嘆願書を出している。これは会津藩・庄内藩を寛大な処分にしてほしいということですが、そういった情報が同盟に入ってきているんですね。そうしますと同盟の方では、秋田藩主は同盟を守る立場にあるというような観測が広まっていきます。あるいは庄内征討命令が鎮撫総督から秋田藩、盛岡藩に出されますけど、盛岡藩に出た命令なども仙台藩の方に入ってきているんですね。こういった情報は仙台藩に入って、それを庄内藩の支藩の松山藩が入手して、それを本藩の庄内藩に伝えたことが分かっています。

あるいは盛岡藩では、庄内征討命令が出たときに、さて、どうしたものですかと、仙台藩に使者を送って伺いをたてます。そうすると、仙台藩の方からは秋田領に討ち入れというような指図が出されます。つまり、盛岡藩は秋田関連の情報を列藩同盟の上部機関に報告します。各藩もそれぞれ別の同盟諸藩から秋田藩の情報を手に入れていますので、同盟内では秋田藩の動き、あるいは鎮撫総督府の動きなどが情報として広まっていったことになります。こういったことを前提にしまして、秋田に討ち入ることになる訳です。

さて、仙台藩が秋田領に出兵するとき、具体的にどのような部隊が出兵したかについては、こちらに一覧表を載せております。他にも攻め込んだ部隊はありますが、出兵した主な部隊は、一応ここに挙げさせていただいております。名前を四角に囲んでおりますのは、新庄で仙台藩が敗れた直後に出兵命令が出た部隊になります。人数は目安ということでお考え頂ければと思います。

結論から言いますと、秋田戦争で仙台藩兵の中心になったのは、大身給人の部隊になります。主に仙台藩領の北方に知行地を有している給人で、それぞれの給人は小隊単位で部隊を派遣しており、1小隊

あたりの人数は、まちまちでございます。

部隊を派遣するときには、給人自らが家臣を率いて出陣する場合と家老などが名代で出陣している場合がございます。例えば、涌谷の伊達安芸ですが、自分は出陣しないで、その家臣を派遣することになります。本日の資料には反映させておりませんが、農兵を派遣するというようなところもございます。ただ、農兵がどのくらい居たのかなど、全容がよく分かっておりません。そして、攻め込む時には、一斉に一団となって攻め込むのではなく、徐々に兵を追加しております。

では、この部隊が、どのような武器を持っていたのかということですが、先ほど保谷先生からお話しが有りましたが、仙台藩もミニエー銃、そういったものを買込んではいます。実際のところを見てみますと、伊達安芸の部隊は兵が259人おり、ミニエー銃が221挺と、それなりに持っているんですね。

ところが亙理大吉の部隊は、銃隊を編制しているのですが、槍を持っている人もいます。史料を見ますとこの銃が曲者でして、ただ西洋銃とあるんですね。この西洋銃というのがゲベール銃なのかミニエー銃なのか、何の銃なのか、これがよく分かりません。そのほか、和銃を持っている人もいます。

この部隊は、出兵時に藩に対してミニエー銃をなんとか80挺くれないかと拝借を願っています。和銃隊を西洋銃隊にしなければ、ほかの部隊と合隊できないという考えからですね。従いまして、秋田戦争のときには、給人部隊の装備が統一されていないということがうかがえるかと思います。

給人部隊というのはお金がありません。進軍していく過程で、藩のほうに手当金をくれとか、物資をくれとか、弾薬をくれと要求している。それほど困っているということになります。

これらの部隊を、どのように指揮していたのかについてですが、もともと出兵するときには、仙台藩の若年寄に各部隊を指揮するようにと指示がありました。一方で、同時期に列藩同盟は、上山藩主松平信庸を新庄口の総督にすると決めたようです。仙台藩兵もその指揮下に入る予定でございましたが、結局は総督を辞退しています。

仙台藩兵は、総督が不明瞭だったことが問題になっていたようでして、庄内藩の史料を見ますと、「仙兵総督なく、万事不便なるが故に」二人の人物、中村宗三郎と但木左近を都督にするんだということを庄内藩に報告しております。8月15日のことです。出兵してから大分時間が経っておりますね。

仙台藩の史料でも、確かに若年寄の中村宗三郎や但木左近が総督と記されている場合があります。また、若年寄だけでなく、戦いのときや緊急のときには、軍事参謀が指揮することがあったようです。ただ、支藩の一関藩は仙台藩の指揮を嫌い、庄内藩の指揮下に入ったという史料もありますので、指揮系統の混乱があったようです。

また、指揮ということですが、仙台藩領に軍事局なり軍務局というものが設けられており、最初は金ヶ崎に軍事局が設置されましたが、その後水沢に移ります。そこで一門の伊達将監であるとか、若年寄であるとか、参謀であるとかが様々協議していたようです。例えば、そこに秋田出兵部隊から援軍要請がくると、それに対応しています。

では現地ではどうするのかということですが、史料を見て参りますと、秋田領内で軍務局が村に通達を出したり、軍事局が各部隊に通達を出したという話が出てくる訳です。この辺は、水沢から指示が出たのかどうか、よくわからない部分もありますが、いろいろ見ていきますと、例えば「各藩見かけ次第、斬り候ことに軍議を遂げ候」という指示を出しているんですね。内容からすると、この場合は現地で指示を出したことになると思います。

あと、兵を具体的にどう動かすのかという指示も軍務局から出ていますので、現地にもそういった軍務局があったと考えられます。

列藩同盟の布告や触れも、いろいろ出ておりまして「諸藩軍事局」が略奪の禁止を通達したり、「秋田出張列藩軍事局」が檄文を出していたりします。ちなみにここで出した檄文は、秋田藩の奸臣（かんしん）が逆賊に与党し、と書いておりますので、秋田藩全体ではなくて薩長に味方する一部の藩士が悪いんだという理屈で出していることになります。

そのほか、「列藩軍義府」も村に触れを出しておりますので、秋田領内で「軍事局」「軍義府」など様々な名義で、列藩同盟の触れが出ているということが分かって参ります。

そうした形で戦争を進めていく訳ですけど、9月10日に仙台藩では降伏を決定いたします。ただ、秋田の方ではまだ戦争が続いているということですね。実際、降伏の情報が出兵部隊に入るのは17日で、それから仙台藩兵が撤退を始めるという形になります。雑駁な報告になりましたけど、私の方からは以上です。

■司 会 （渡辺）

どうもありがとうございます。皆様、資料の14ページのところに今日の核心的なところがあるかと思えます。まず最初にこの点を押さえておいていただきたいと思えます。

それはつまり、5月1日、沢副総督が秋田藩領に入ってしまう、この点ですね。そのあと列藩同盟側は秋田藩に対して列藩同盟側に残ってくれ、といって使者を派遣してくる。ところが7月4日になって、秋田藩はその仙台藩の使者を暗殺し、同盟を離脱してしまう。するとそこから一気に戦争へと突き進んでいくという、こういう時間経過、この点を明らかにしていただきました。

その上で仙台藩の場合、同盟側としては秋田藩側の動きを情報として把握していたことが明らかにされました。そして、実際に攻め込んできた仙台藩の兵士については、資料の15ページにあるように仙台藩領の北部に知行地を与えられた大身給人たちが中心だった、ということですね。

しかし、その装備面をみると洋式銃には違いないんだけど、それが和銃と混在して用いられているという点が指摘されました。さらにそこであらかじめ定められた指揮系統と実際の戦争での指揮系統を見てみますと、実は指揮系統に相当な混乱があったんだ、ということがご報告で明らかにされたかと思えます。

では続きまして庄内藩側の動きについて、長南先生よろしく願いいたします。

■長南伸治 （上山城郷土資料館学芸員）

よろしく願いいたします。上山城郷土資料館学芸員の長南伸治と申します。庄内藩の視点からとタイトルにしましたとおり、庄内藩が朝敵にされた罪状について、あと秋田戦線での動き、さらに戊辰戦争後に戊辰戦争がどのように庄内に語られていったのかについて、簡単にご紹介していきたいと思えます。

まずレジュメに沿って、1、戊辰戦争期の庄内藩の動きについてですが、これまで保谷先生と栗原先生のお話しにもありましたので、事細かな話は、ここでは差し控えたいと思えます。皆さんにお配りした資料の表の1を見ていただくと、一番肝心な部分は戊辰戦争に突入する直前の慶応3年の9月、大山庄太夫一件という藩内の主導権争いに関する事件が起きています。そこで庄内藩内は公武合体派と佐幕

派の争いに終止符が打たれ、佐幕派が主導権を握るという大変大きな出来事がございます。

その年の12月に薩摩藩邸焼打事件が起き、翌々月から戊辰戦争、鳥羽伏見の戦いが始まりますので、戊辰戦争直前の庄内藩はこういう状況だったということを、まず頭に置いていただければ大変ありがたいと思います。

続きまして2番の庄内藩が朝敵とされるまでの経緯ですが、慶応4年正月の鳥羽伏見の戦い、その後新政府は朝敵処分を発表するわけです。その際、庄内藩は朝敵にはなっていないんですね。対象外、触れられてもいないわけです。そうした中で徳川慶喜追討令が慶応4年1月7日に発せられ、それに対する返答を伝えるために、庄内藩は使者を京都に派遣します。

派遣の目的につきましては、慶喜追討を免除していただきたいということと、天皇元服の祝い品を献上するためだと資料上確認できるわけですが、結果として京都に到着する前、東海道三州吉田駅で新政府の東征大総督軍と遭遇し、同軍の参謀林玖十郎から、新政府への忠誠の証を示す前に使者を派遣しても無駄であると、通達されて引き返したというわけですね。

そこで庄内藩は、徳川家に代々仕える譜代藩。そういった立場からして新政府側から疑いの目で見られていると伝えられたと言われています。

その翌日、突如として庄内藩に朝敵とする処分が下されます。朝敵とされたものの、庄内藩側としては、その理由が分からない。しかしながら、徳川慶喜に鳥羽伏見の戦いの際に同意した藩と同じ処分が下されてしまいます。

この庄内藩が朝敵に浮上してきた経緯の中で、最近の研究の中で大変興味深いものがあります。その中では秋田藩が関与していたのではないかとされています。それは慶応4年の1月、秋田藩の勤王派と言われる人たちが、庄内藩征討をアピールしていたというわけですね。その理由ですが、秋田藩内に新選組に関与している者がいたということで、藩外勤王派の人々の秋田藩に対する印象が良くない。そうした悪評を払拭するためのアピールとして、秋田藩の勤王派が庄内藩の征討を主張していたことが確認されるそうです。

そうした中で、前の年の12月末に薩摩藩邸焼打事件が起こるわけです。薩摩藩邸焼打事件とは、12月24日旧幕府の命を受け、江戸薩摩藩邸に潜み関東で旧幕府に対する徴発行動を展開していた浪士

捕縛に向かった庄内、上山、鯖江藩などの諸藩兵と、同邸内の浪士との間で戦闘に発展した事件です。

多くの浪士が捕縛あるいは討取られています。ちなみに同事件発生理由につきましては、旧幕府内で薩摩藩との戦争を決意し実行した。または、庄内藩の江戸の屯所に薩摩藩邸に潜む浪士が銃を撃ってきた、それに対する庄内藩の報復として行われたなど、いろいろ言われております。

ともあれ薩摩藩邸焼打事件で、庄内藩の捕縛を逃れた浪士の中に、秋田藩士の高瀬と楠という人物がおったそうでした。この二人は事件の後、京都に向かい、薩摩藩士西郷隆盛に事件の顛末を報告しております。その後、同人たちは後に奥羽鎮撫副総督として奥羽に参ります沢為量にも接触しております。その際、どういった内容を報告したのかは分かりませんが、そのあたりから西郷と沢の言説に、庄内藩を討つべきだという主張が見られるようになるそうです。その辺は今後もう少し追及していかなければならない点であると思います。

次に慶応4年2月17日以後の新政府側から提示された庄内藩の罪状とそれに対する周囲の反応についてですが。まず罪状①の徳川家復権を目論んだとの点について、周囲の反応は、これまでの庄内藩の動きの中で、いったい何が徳川家の復権を目論んだものに該当するのか判断出来ていない状況といえます。

罪状②として、先ほど申し上げた江戸の薩摩藩邸焼打ちが挙げられる。しかしながら、焼打ちは庄内藩と薩摩藩の問題であって、庄内藩と新政府軍の問題であるというように、周りではなかなか置き換えることが出来なかった。

次に罪状③について、慶応4年4月、庄内藩が旧幕府から管理を任されていた土地、柴橋陣屋（旧幕府の天領・現山形県寒河江市内）、そこを庄内藩が不当に占拠し、かつ、そこに保管されていた米を奪ったことが罪状として上げられる。この寒河江柴橋事件に関しては、お配りした資料に簡単に概要を記しておりますが、これは慶応4年4月2日、寒河江柴橋代官所駐留の庄内藩兵を討ち、かつ、そこに保管されていた2万3千俵の米を押収するために新政府軍が出兵した事件です。

この場所は、同年2月7日、江戸市中取締の功労として庄内藩が旧幕府から管理を命ぜられていたのですが、庄内藩兵は新政府軍が同地にやってくると事前に聞きつけて撤退しています。新政府軍はそこに保管されていたとされる米を押収できずに終わっ

ている。これは庄内藩が不当に土地を占拠し、かつ、米を奪ったことが原因と非難し、征討理由にしたと言われている。

これについての最新の研究をみると、大変面白いことが言われていまして、この時期に寒河江柴橋のあたりには2万3千俵もの米はなかったという、そういう見解を示されている研究者もおります。これまでは、米をここから庄内藩が自領に持ち帰ったと言われておりましたが、それ自体、怪しいのではと言われている。

しかしながら、すでに慶応4年1月10日、旧幕領は新政府の直轄地であるとの布告が出ている状態ですので、この地に庄内藩兵が出て行ったこと自体、新政府から征討理由にされかねません。庄内藩も隙を見せたことは確かなことといえます。

以上、こうした罪状を示していたわけですが、これに対して周囲の諸藩は大変困惑していたわけですね。別紙の資料レジュメ1ページ目、2ページ目には、慶応4年閏4月7日に庄内藩に対して秋田藩が送った、いわゆる宣戦布告の書と、それに対する庄内藩の返答を載せております。

秋田藩の宣戦布告を要約しますと、秋田藩としては戦はせずに収めたいと奥羽鎮撫副総督の沢にお願いしていたが聞き入れてもらえなかった。これ以上、沢の言う事を聞かないと朝廷の命令違反になるので、仕方がないから攻めますと言っているわけですね。それに対する庄内藩の返答は、我々が朝敵とされる理由が全くわからないので、出来れば教えていただきたい。それでも秋田藩が庄内藩に攻め込んでくるのであれば、これは武門の慣いとしてお相手しますよと、とても宣戦布告とは言えない内容になっているわけです。

この内容からも、周りではなぜ庄内藩を討たなければならないのか、正直分かっていない状況であったことが分かります。こういった曖昧な罪状が示されているわけであり、周辺の諸藩も混乱しています。この罪状に関する話は、戊辰戦争後の庄内の中で、同戦争を語る際に大きな争点になっております。これは後ほどご紹介いたします。

次に、庄内藩と秋田戦線についてですが、庄内藩は秋田藩が同盟を脱退したという話を知る前は、白河口、福島方面に向けて救援部隊を出しています。その部隊とは後に秋田攻めの主力部隊となる一番大隊、二番大隊でした。

秋田藩が同盟を脱退する以前の話ですが、庄内藩は象潟あたりに新政府軍が多数集結しているという

報告を受けて、同地域付近に三番大隊を派遣しています。いよいよ秋田藩が同盟を脱退したと報告が入りますと、白河口に向けていた兵を反転させて秋田に向かわせます。

慶応4年7月16日、一番大隊、二番大隊が秋田方面に向かっているさなかですが、三番大隊は三崎峠（鳥海山の西裾野、現山形県遊佐町と秋田県にかほ市の境い）で秋田藩ら新政府軍と戦っています。よく庄内藩は、領内に敵を一步たりとも入れさせなかったと言われているますが、実はここで、一旦領内に敵の侵入を許している事実は重要なことだと思います。

そして、7月28日から本格的に秋田藩領に攻め込んで行きます。庄内藩単独ではなく、仙台藩であり、上山藩であり、その他諸藩と共に秋田藩領に進軍しています。海岸方面からは三番大隊、四番大隊が久保田城を目がけ進軍しています。

戦いの経過については、いろいろありまして、結局は久保田城を目前にした9月14日、上山藩が降伏し、その辺りに庄内藩も久保田城攻撃を断念して総退却をするという流れになっています。9月17日に秋田戦線から撤退を開始し、22日までに庄内藩領に撤退を完了させております。

戦場での庄内藩兵の振る舞いについて。これは秋田戦線に入る直前の7月14日、新庄城を攻略した庄内藩二番大隊の隊長酒井吉之丞は、敵の新庄藩は城に火を付けて逃げるわけですが、そのとき、庄内藩兵に新庄藩主がいた居間には土足で浸入するなど、通達したそうです。そして、戦後はですね、新庄の地で戦禍に巻き込まれ罹災した人々に対して、家を建てるにあたっては官林伐採の許可を出したり、困っている人々の保護だったり、敵の戦死者のお墓を造ったり、租税半減を命じるなど、新庄の人々に配慮した政策を実施し、何事もなく治めたということです。

また、それに類するような話として、7月29日に秋田藩領の院内に進軍した時ですが、院内の住民が芋汁で庄内兵を歓迎したとの話が残っている。庄内藩兵は放火や略奪をしないと安心したためと言われている。これと同様のことが、ほかに浅舞でもあったと言われている。

あと横手城攻略後、8月12日ですが、戦死した人々を庄内藩兵が丁寧に葬ったという話を聞きつけて、現地の住民が喜んで、以後庄内藩兵に食糧などの支援を行ったという話も残っています。8月14日に角間川村に着いた際には、同じく秋田領内に攻め込んでいた仙台藩の一人がどうやら略奪行為を

行ったと聞きつけて、その仙台藩兵を庄内藩が捕まえて斬首したということですね。こうした行為に角間川の住民は喜び、庄内藩兵がいれば略奪行為に遭わないということで、庄内藩兵を宿泊させる人が続出したという記録が残っています。

しかしながらですね、保谷先生の話にもありましたが、放火等、従わざる者には厳しい態度をとっていたということは確かですので、庄内藩兵は歓迎されていたと単純に考えるのは尚早なのかなと思います。

次にですね、戦時中の庄内藩の領民についてですが、慶応4年の8月、町兵、農兵の動員を開始したとされています。庄内藩の正規兵（藩士）を補充できない状況になっている。この辺になると庄内藩もかなりいっぱいいっぱいの状態になってきているわけですね。

戦線に動員された町兵、農兵の部隊ですが、庄内藩兵全体の約4割に達したとされています。どういった人たちが戦場に赴いたかと言えば、領内の村々の石高や家の件数を基準に招集された者、および志願者で編成したとされています。

庄内の町兵・農兵の特徴ですが、装備が大変豪華であったとされており、庄内藩の正規兵は、豪商の本間家の支援により装備は最新式、農兵、町兵についても自前で最新式の武器を用意した者もいたそうです。

それと、領内では老若男女を問わず武器製造に動員されています。正に庄内藩側も総力戦体制であったといえます。

あと進軍のスピードを見てみますと、8月の後半あたりからですね、どんどん遅くなっています。当初はすごいスピードで久保田城に迫って行きますが、神宮寺辺りで停滞する。これは後半かなり苦戦していたことを示しています。

次に4の近代の庄内における戊辰戦争語りということで、戊辰戦争後どのように庄内の中で同戦争が語られていったのかについて見ていきます。

一つ目の視点は、秋田藩側から提示された戊辰戦争史観に対する反応について。狩野徳蔵という人物がいます。この人は元秋田藩士で明治以後は歴史叙述に取り組んでいます。この人物が明治23年4月、「戊辰出羽戦記」という秋田藩側からの戊辰戦争を書いた歴史書を出版しています。この本は出版から約4か月後の同年8月、元奥羽鎮撫総督の九条道孝を通じ皇室に献上されています。大変売り上げも良かったとされており、

それに対する庄内の反応は、受容と反発の二つございます。受容の例としまして、同年8月ですね、皇室に献上された直後、庄内藩支藩の松山藩の藩士だった松森胤保が「朝敵の予か輩か挙動も、まったく君の寵愛によって、天皇陛下の高覧を辱けることを得るに至るものというべし」。要するに、朝敵だった我々庄内藩の動きが、狩野徳蔵の気遣いによって天皇陛下に伝わり大変うれしい、というようなことを言っている訳ですね。

その反面、時間が経つとその反応も変わってきます。別紙資料の3は、元新徴組、これは元庄内藩四番大隊に組みされた部隊でしたが、そこに所属していた千葉弥一郎という人間が大正後期から昭和初期に記した文章となります。そこでは「既刊の戊辰戦争関連書籍は、太政官日誌や各藩及び日記届出書の類中、その著者たちにとって都合の良い部分のみを引用し著されたもので、信用するに足りない。時に庄内藩の動向を後世に正しく伝えるためには、現段階で高評価を得ている秋田出身者の著作物」、ここで狩野徳蔵の『戊辰出羽戦記』を名指しで挙げられている訳で、「その誤りを正す必要がある。」と述べられています。このように時間が経つとやや反発が出てきていることが確認されます。

続きまして、大正期、末松謙澄と庄内の郷土史家との論争を見ていきます。この末松謙澄という人物は、長州藩の出身で伊藤博文の知遇を得て明治以後政界で活躍し、歴史叙述にも熱心に取り組んでいます。その人物が「東北人謬見考」という、戊辰戦争に対する東北人の誤った見方を批判する論評を発表しています。その批判の矛先は庄内に向けられています。それに対して、庄内の郷土史家羽柴雄輔と国分剛二の二人がすごい反応をしています。つまり反論活動をしているわけです。

争点として、ここで争点1、2、3と記していますが、争点はこのほかにもたくさんございます。すべて読んでいくには時間がないので、争点1の部分だけご紹介させていただきますが、江戸薩摩藩邸焼討事件発生の原因について、末松謙澄は「東北人謬見考」で、まず旧幕府の閣僚が薩摩藩、長州藩との戦争を意図して、この事件を起こしたとしています。その証拠に薩摩藩邸から脱走した人間を乗せた船を攻撃した旧幕府の司令官榎本武揚は、攻撃理由として、この事件で旧幕府と薩摩藩は戦争状態に入ったためと語っているということですね。

これに対して羽柴雄輔が反論するには、薩摩藩邸浪士が庄内藩宿所を襲撃したことが事件の端緒であ

る。庄内藩の浪士討伐要求に対して旧幕府の閣僚たちは拒否し、それに対して庄内藩は失望、がっかりして江戸市中取締の辞退を申し入れたところ、困った幕閣が薩摩藩邸の浪士たちを引渡すように交渉しなさいと命令した。こう言った一連の幕閣の対応からして、末松が主張するような旧幕府が戦争を考えていたとは判断できないとしています。

それに対して末松謙澄は再反論しています。宿所襲撃を浪士討伐の理由とするには不十分と庄内藩は判断したが、旧幕府が強行に討伐を命じたため仕方がなく従ったと、後に旧庄内藩士が証言していると末松は論じています。末松はあくまでも旧幕府が命令したという構図を主張しています。

これに対して羽柴雄輔は亡くなっているので、かわりに国分剛二が出てきて再反論しています。国分は末松の主張の根底には、事件を口実に庄内藩を賊軍に仕立て上げようとする意図がある。それを正当化すべく、庄内藩が幕府の命令で事件を起こしたと主張したことは、末松が庄内藩を賊軍とする口実探しに非常に苦しんでいたことを示していると主張しています。その他の争点部分は、各自読んでいただければ大変ありがたいです。

最後にお話ししてきたことをまとめますと、庄内藩が朝敵とされた罪状というのは、他藩に比べれば大変曖昧であったということ。あと、庄内藩兵と秋田藩の領民に関しては、庄内藩兵の模範的な振る舞いと、庄内藩兵を歓迎する秋田藩領民の姿というのがありましたが、やはり敵に味方したと判断すれば庄内藩も放火は辞さなかった。

戦時下の庄内藩領については、先ほど説明したように農兵、町兵の秋田戦線投入であったり、豪商からの軍資金献上、老若男女問わず武器製造への動員があった。そして、外部から示される戊辰戦争時の庄内藩、つまり秋田藩、薩摩藩、長州藩からの視点で描かれた史観に対し、庄内では動揺している姿が確認できるということでございます。

以上駆け足でしたが、私の報告は以上であります。

■司 会 （渡辺）

どうもありがとうございました。

庄内藩からの戊辰戦争史研究といえば、今日のレジュメ資料集で言いますと23ページの4以降にあります。あの戊辰戦争は庄内藩にとって何だったのか、そして、庄内藩は賊軍という歴史認識は訂正されなければならない、そういうところに研究の眼目

があるようです。今回は時間の関係で長南先生には、そのところを少し端折っていただいて申し訳ございません。

先ほどの栗原先生の仙台藩側のご報告と絡ませて考えますと、資料で言いますと19ページ、20ページあたりのところを押さえておいていただきたいなと思います。つまり庄内藩に対しては、ややもすると最初から官軍側が討伐の目標に定めていたような思い込みがあるかもしれません。けれども、実はそうではないようです。

それから庄内藩と同じ出羽の国に位置する秋田藩についてですね、官軍、朝廷側は秋田藩を出羽の国の触頭に任じていました。つまり朝廷は、出羽の国については、秋田藩、佐竹氏を通して指示を出す、そういう政策を早い段階から示していた、と長南報告は指摘しています。

先ほどのご報告から、こうした大事なことが確認できました。資料の19ページですね。ここで官軍としては庄内藩に対して最初から朝敵だとは決めていなかった、ということが明らかにされています。つまり、慶応4年の2月中旬になったところで庄内藩は朝敵であると、官軍側が公表したのです。ところが、そのときにですね、具体的な罪状が明らかにされず、朝敵の理由が不明なままなんです。ここなんです。罪状が明らかにされないまま2月中旬になって、突然、庄内藩は朝敵だと位置づけられてしまったのです。

そのとき秋田藩は、出羽の触頭として庄内藩対策の矢面に立て、と朝廷から命じられている訳です。ここにある意味、秋田藩に不幸を招く出発点になっています。

ですから、秋田藩はこの年の閏4月に由利の海岸部から庄内に兵を出す訳ですけども、秋田藩士はみな心の中では、できれば庄内の兵隊さん、降伏して頂戴ね、何故なら庄内藩が朝敵である理由が私たちにもわからないのだから、こういう気持ちでいたのではないかと思うんです。そういうところが、先ほどの長南報告で鮮明になったと思います。

続きまして、秋田藩側の動きについて畑中先生、よろしく願いいたします。

■畑中康博 （秋田県立博物館学芸員）

戊辰戦争150年目の視点。それは新政府側についた秋田藩は、いったい誰の命令で戦っていたのか。私は、指揮命令系統からこの戦争の本質を語ります。

皆様、資料の29ページをご覧ください。戦争は、現在の県南地域一体が、仙台藩、庄内藩にほぼ制圧されています。このときの秋田藩の部隊の動きについて記した35ページの別表1番をご覧ください。

梅津小太郎隊は7月7日出陣します。7月23日梅津の部隊は湯沢におります。それから院内、横堀、横手、そして大曲と退却します。このあと8月15日以降は神宮寺におります。先ほど長南さんのお話の中で、8月に入ると庄内藩の攻撃のスピードが落ちるとありましたが、これは神宮寺嶽、それから太平山の強固な陣地戦を行ったために、庄内藩の攻撃のスピードが落ちるわけであります。

それから、秋田藩の三番手の古内左惣治の部隊は7月7日出陣。矢島に行きまして大沢に退却、角間川、大曲、花館そして大河原、これは神宮寺から玉川沿いの土手の地域になります。そこに陣地を張ります。この秋田藩の部隊は、誰の命令でここに移動したのか。ここにスポットを当ててみたいと思います。

結論を先に述べます。奥羽鎮撫副総督の沢為量、そしてその任を受けた監軍、新政府の戦さ目付ですが、秋田藩の部隊は彼らの命令によって動いていた訳であります。そこから新政府に与することは、一体どういうことだったのかという話になります。

30ページをお願いします。最初にあげる史料は梅津小太郎の部隊にいた中安泰治の日記であります。この日記を見ますと史料2番をお願いします。陣中日記の中に、肥前と長州の隊長から指図を受けているとあります。それから彼らの指図とは、番兵差出すべく趣きとあります。従いまして秋田藩部隊の小部隊長である中安泰治は、肥前と長州の西日本から来た部隊長の指図により動いていたのです。

自分の直属の上司である梅津小太郎の命令で、隊が動いている訳ではありません。これについて、陣中日記の7月21日条、史料3番を見ますと監軍の上田雄一、これは長州藩士ですが、彼も大立腹。「4番隊長より軍事進退いたす筋これ無し」とあります。このように秋田藩は新政府に与しながらも、その実態は援軍としてやってきた西日本の諸藩から下に見られる、これが戦場での秋田藩士の姿だったのです。

その後を見ましょう。8月1日以降は退却戦になりますが、「沢より退却」、沢の命令で退却という文言が続いて行きます。従いまして中安泰治の軍事行動は、4番隊長・沢副総督に命令されていたことが確認されます。藩主の命令、それから軍将の命令で中安は動いていた訳ではないことがここから分かります。

ます。

別表の2番、37ページをお願いいたします。これは長州藩士の監軍上田雄一が古内に宛てた戦争の指示書の一覧です。例えば古内124番、8月8日、内容を見ますと「大沢村より退却せよ」。その次、8月9日、「探索人を入れ込み、放火を篤と沙汰せよ」。領民の家を焼く秋田藩の部隊は、新政府の官軍の命令によって、家を焼いていたという動かしがたい事実がここにあります。その次、「大曲村まで退却せよ。神宮寺村まで退却せよ。惣軍大曲まで退却せよ。花館村へ退却せよ」と。秋田藩の部隊は、いちいち監軍上田雄一の指示のもと動いている訳であります。

それでは資料31ページにお戻り願います。これは、流山市にお住いの貝塚清成さんが私家版で出した貝塚清直日記です。この貝塚清直、当時は貝塚久吉と名乗っておりましたが、貝塚久吉は古内隊の隊士、ここにも上田雄一からの指図という文言がたくさん出てきます。

史料4番をお願いいたします。「上田より沙汰あり角間川まで引き揚げの儀これを伝う」と。古内家文書を見るまでもなく貝塚の日記の中にも、上田からの指示で秋田藩は動いているということがあります。史料5番も同じです。上田雄一の指図で台場を受け取って長福寺に宿陣した。それから史料6番をお願い致します。ここには上田雄一より部隊展開の指図があったとあります。

それからひどいのが、史料7番、監軍上田雄一は軍将の古内に指図するのではなく、戦争遂行の過程で軍将を経由しないで、いきなり小部隊の長へ指示を出すようになります。明らかに秋田藩の部隊の指揮命令系統がおかしなものになっています。これを見ますと上田雄一が貝塚久吉に書状を出した。そしてここに、「角館から下延村に繰上り候、寺崎手、ただ今より立石へ差し返さず申し候ては、空虚と相成り居候につき云々・・・」。直接部隊に指示を出すようになっています。

ひどいのが史料8番です。9月11日の日記に、「一つ、小種口、戸村勢の油断より討ち破られ、刈和野、神宮寺辺り争戦と相成り、よって上田雄一より指図につき、昼過ぎ我ら一手にて小杉山へ出張り固める」と。上田雄一から指図があって刈和野と神宮寺が危ないから小杉山に行きなさいというものです。ところがこの9月11日という日は何の日かと言いますと、沢副総督が神宮寺にいて、そこに会議所というものを開いていて、言わば本営が神宮寺にあったのですが、沢が部下を捨てて角館へ逃げ出し

た日がこの9月11日であります。

神宮寺から角館に行く途中にある集落が小杉山にあります。貝塚久吉は、何のために小杉山に出張するのか、その真相を教えられぬまま上田から部隊の移動を命ぜられているのです。

33ページ、この絵が神宮寺付近戦争の略図で嶽山や太平山に強固な防衛陣地を造っていて、神宮寺に沢副総督を中心とした会議所があった訳です。ここから角館へ、沢は部下を捨てて単身逃げ出すのです。

では監軍という役職、これは何か。中安泰治の出陣日記の中にあります。8月21日条、史料9番をお願いいたします。「沢殿よりご催促にて罷り出候ところ、別紙のとおり御書付をもって仰せ渡され候、監軍中安泰治」。監軍という役職は藩主とか藩庁とか、そこを経由しないでいきなり奥羽鎮撫副総督が、はいあなたは今日から監軍お願いします、というふうにして任命される役職だったということになります。

そして中安泰治の人事任命は、あなたは監軍になったので「秋田兵隊に召しつけられ候こと」と。その後、日記を見ますと「検使石河敬治殿、武頭山県三郎、高屋五左衛門へ知らせ致し候。手紙をもって啓上致し候。然らば拙者義、沢殿より監軍仰せ付けられ、秋田兵隊へ召しつけられ候」、こうあります。ここで初めて秋田藩の石川、山県、高屋らに、私は実は沢様から監軍に命じられたのだと、彼はしゃべっている。

繰返しますが、この人事任命に藩主や藩庁はまったく関与しておりません。そして出陣日記、8月23日条に沢殿より旗をもらった。菊の御紋に監軍と認めた旗をもらったと、なんか誇らしげに書いてあります。

その後、参謀局より呼出しがあつて久保田に出府すると大山格之助より、新たに到着した肥州勢を下筋、大館の方におくる旨を説明されたことが書かれている。この大館に行った部隊が、荷揚げ場で大館給人たちと合流して、大館城を再び南部藩から奪還、反転攻勢に成功する訳ですが、いずれそのことを説明される。つまり、戊辰戦争、秋田方面の戦いは参謀局の大山格之助が作戦のグランドデザインを考えて、沢副総督を中心とした神宮寺会議所から監軍に指示を出す。秋田藩の部隊に付き添っている監軍は、当初軍将に対して指示を出していましたが、後に小部隊の長にいきなり直接指示を出すようになります。こんなことをしていると軍隊はおかしくなる。何のために軍将がいるのか分からなくなってきます。

慶応4年7月4日に、秋田藩は約2か月の逡巡を経て新政府側につくも、戦争が始まると、秋田藩主や藩庁上層部、上部権力は、新政府に藩の部隊の軍事指揮権を奪われているわけであります。

従いまして、新政府側につくということは、今まで秋田戊辰戦争のイメージは、秋田藩は新政府—奥羽列藩同盟—新政府と藩論が転換し最終的に新政府側について戦い、そこに西南諸藩から援軍が来て、部隊の戦力が増強されて何とか勝利になったと考えがちですが、そうではなくて、新政府側につくということは、新政府という巨大な権力機構の一つの組織になるということの意味したことが、ここから指摘することができるのです。

結論、3点。(1)従来の秋田藩の戊辰戦争に対する理解は、秋田藩は新政府と奥羽列藩同盟のはざ間で藩論が揺れ動いて、最終的に新政府側についたことで、同盟軍と戦い、西日本からの援軍が多数来たこと、佐土原藩などですが、それで勝利したというものです。

同時代の記録から戦争の指揮命令系統に着目すると、秋田藩士は総督府、参謀局から神宮寺の会議所、副総督そして監軍の指揮命令系統で戦っていたことが明らかになります。秋田藩の戊辰戦争は、自領に敵を引き入れての防衛戦であったにも関わらず、藩主や藩庁上層部が軍事の指揮権を発揮することはありませんでした。

次、(2)秋田藩士の中安泰治は、沢副総督に監軍に任命されますが、ここにも藩主や藩庁上層部は関与しておりません。このように藩は指揮命令系統のみならず、前線の部隊における人事権も失っています。

(3)軍事面における藩主、藩庁の存在意義の喪失は、藩主からの命令で戦争に出る訳ですが、しかし実戦では藩庁から命令がくるのではなくて、昨日、今日やってきた監軍からいちいち指示を出される。何のために藩主、藩庁があるのか分からないまま彼らは戦い続けなければなりません。この軍事における藩庁の存在意義の喪失は、地方における武家政権終焉の一つの過程として、とらえることが出来るのではないかという見通しを持っております。

すなわち天皇政権の中の新たな君臣関係に、藩主が戦闘に直接関係していない、上級家臣は不要と。天皇と天皇の軍隊というこの図式の中に、中間的なものはいらないというような論理のようなものが、戊辰戦争で構築され始めたのではないかというように考えます。4時15分になりましたので発表を終

わります。ありがとうございました。

■司 会 （渡辺）

畑中先生ありがとうございます。私からは、もう纏めるまでもなく資料の34ページにあるとおりですね。慶応4年閏4月段階の列藩同盟に参加しているときの秋田藩は、由利の海岸沿いに庄内に向けて兵を出しているわけですね。そこでちょっと庄内藩と戦って、あるいは仲間討ちをしたりして、そこですぐに兵を引くわけですが、その時点の秋田藩の戦い方をみると、明らかに秋田藩が主導権を握って、秋田藩の作戦として主体的に戦っていた訳です。

ところが、仙台藩士を暗殺して列藩同盟を離脱し官軍の側につくと、同盟軍に攻め込まれる訳ですが、従来の考え方では、同盟軍に攻められる秋田藩を官軍が助けてくれた、というような認識が普通だったと思うんですけども、畑中先生はそうではないと言います。

実際の戦争過程をみると、秋田藩はもはや戦闘の場面では主体性を失って、官軍側の一つの部隊となって動かされていた、命令指揮系統を見るとそれが明らかだったことがわかる、と畑中先生は指摘されています。命令系統に従えばひどい話だと思いますが、官軍の指示を受けて、秋田藩士が自分たちの村に火を放つんです。官軍から指示が出されるとそれに従わざるを得ない。実際の戦争はそういう戦争だったことが明らかにされたかと思えます。

畑中先生からは、これまでにこうした状況の中で、戦線離脱する秋田藩士が多かったことも明らかにされています。この戦争の最中に病気になったり、仮病をつかったりして家に帰ってしまう、そうした兵士が結構いるんだということを、畑中先生はこれまでの研究の中で、すでに明らかにされていますが、そうした背景には、こういう現実があったんだなあ、と考えさせられるご報告だったかと思えます。

それではここで時間をいただいて、次の討論に向けた準備をさせていただきたいと思えます。その間に質問などございましたら、質問用紙にご記入をお願いします。よろしくお願いいたします。

《休憩・午後4時20分再開》

■司 会 （渡辺）

それでは、これから討論に移りたいと思います。会場の関係から午後5時までとなっておりますので、どうぞ協力をよろしくお願いいたします。

討論を進めるに当たりまして、全体を大きく3つに分け、時間経過に沿って考えて参りたいと思います。まずは、慶応4年の戦争に至る直前段階のことを確認します。その上で実際の戦争の経過に従って戦争を振り返ってみる。そして最後に、終戦後、しばらく時間を経た段階で、この東北地方の秋田で繰広げられた戊辰戦争について、どのような評価がなされてきたのか、そういったところを最後に考えてみたいと思います。

なお、以下、年号、月日等については、すべて和暦を用いることにします。旧暦ですので、旧暦の暦というのは、今の暦に換算するには、だいたい1カ月から40日ぐらい日数をプラスしてやると今の暦になります。そういう元の旧暦のまま、つまり史料に記される日付をそのまま使う形で統一したいと思います。

討論に入る前に、最初に戊辰の役とか、戊辰戦争とか言ったりするわけですが、あるいは世代によっても、これらの言葉づかいが違つかもしれません。この点、何だろうな、と思っている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。そこで、まずはそういった用語の意味、戊辰の役と戊辰戦争とで何か違いがあるのか、こういうところから入っていききたいと思います。

では、そのあたりを基調講演の保谷先生からコメントをいただきたいと思えます。先生お願いいたします。

■保 谷

役（えき）のことについては、あまり考えてはいないのですが、役は外国とか民族とかの戦いとは言われるのですが、そうじゃない戦いもありますので、むしろ語源的には人々を戦いに動員するということから、役という言葉が使われていたのかなと思うところです。いずれにしましても、現在は表現的に客観性を持たせるために、戊辰という干支、年号ですね、この年ということ、あるいは地名をつけて戦争を、例えば長州戦争とか、鹿児島戦争とか、そういう形で使うことが多くなってきたということですね。

■司 会 (渡辺)

はい、ありがとうございます。客観性というキーワードを示していただきました。戦争という言葉を用いて客観的に考える、客観的に考えるために戊辰戦争という言葉づかいをする、ということを最初に押さえておきたいと思います。

それでは、いよいよこれから本題に移りたいと思います。まず鳥羽伏見の戦いに突入する直前段階を簡単に確認しておきたいと思います。壇上の先生方には一言ずつお願いしたいと思います。最初に秋田藩についてはどうだったでしょうか。時間の制約もありますので、特に戦争にいく前の段階で、ここを特に把握しておくべきだということがありましたらお願いします。

それでは、秋田藩に関しまして畑中先生お願いします。

■畑 中

鳥羽伏見の戦いの直前の秋田藩ですが、長南さんの話しにもありましたように、京都詰め藩士たちが、周旋活動をしていた事実があります。しかし、それは藩を挙げてのものではありません。国許の藩士の日記、家老の宇都宮孟綱日記、膳番の岡百八日記を見る限り、彼らは普段と変わらない時を過ごしていたことが分かります。

それだけに慶応4年の鳥羽伏見の戦いの後、太政官から秋田藩に命ぜられた会津藩への出兵命令、これに始まる戦争への道は、平和の失速、平和の暗転ともいえる事態だったと言えます。

■司 会 (渡辺)

ありがとうございます。秋田藩も京都詰め藩士が出張していて、彼らは決して何もしていなかった訳ではなかった。京都の政局の中心にいた秋田藩士たちは、それなりに活発に動いていた、ということが確認されました。

しかし、それは必ずしも秋田藩を代表した動きではなかった、ということも今のお話しでわかったかと思います。畑中先生ありがとうございます。続きまして、仙台藩ではそのへん如何でしょうか。

■栗 原

幕末の仙台藩というのは、決して目立った動きは

していません。ですから戊辰戦争が始まって、急に動き出したという印象がある訳です。しかしながら、詳しく見ていくとそうでもない部分もございます。

先ほど国許の話がありましたけど、確かに仙台藩も国許では、それほど大きな動きというものはありません。ただ、大政奉還以降、京都にいる藩士たちが、活動するんですね。例えば奥羽の有力藩と会議を開いたり、あるいは王政復古クーデターの後に、西国の有力藩と手を結びまして建白書を出したりしています。他藩と手を結んで国レベルの政治問題に対応していくという動きを、少なくとも京都の藩士は行ったということになります。

奥羽で連携する動きというのは、奥羽列藩同盟の結成に影響を与えますし、西国と手を結ぶという動きは、戊辰戦争のときの仙台藩の戦略の一つになっていくことになります。以上です。

■司 会 (渡辺)

京都詰め藩士の動きについて、栗原先生はすでに、いくつもの論文を発表され、ご著書をまとめておられます。その中で明らかにされていっていますが、仙台藩士はですね、相当な大国意識を持っていて、戊辰戦争になる直前、慶応3年の段階にですね、奥羽を連携させようとしたり、あるいは西国の雄藩と手を組もうとしたり、そういう動きを積極的にやっていた、そういう点が確認できるというご指摘ではなかったかと思います。ありがとうございます。

続きまして庄内藩では、この点どうでしょうか。長南先生お願いいたします。

■長 南

先ほどの報告でも若干触れましたが、庄内藩は、天保13年から藩内で佐幕派と公武合体派の主導権争いが起こっております。事態は佐幕派優勢で進んでいたのですが、慶応2年の長州征討が失敗しますと、それによって藩内の公武合体派から批判が起こることを恐れ、慶応3年に佐幕派が公武合体派を粛清します。

そこで藩は佐幕派に固まります。ちなみに薩摩藩邸焼討事件を指揮した家老松平権十郎は、藩の佐幕派の中心と言われていた人物です。そういった体制で鳥羽伏見の戦いに向かっていったと思われます。

■司 会（渡辺）

ありがとうございます。戊辰戦争に至る前段階で、庄内藩、鶴岡では佐幕、勤王のかなり激しい争いが実は繰り返されていた。そういう中で、最終段階で佐幕派が公武合体派を粛清して実権を握っていく、そういう一連の藩内抗争があったということが、今のお話しでよくわかりました。ありがとうございます。

それでは保谷先生、全体を見渡しまして、戦争直前の状態で、ここは特に注意しておいた方がいいなという点などありましたら、お願いします。

■保 谷

先ほども少し申し上げたのですが、慶応3年の秋、討幕派の計画がはっきりしてきた段階で、徳川慶喜は太政官奉還を行うわけですね。それは先手をうって太政官奉還を行って実権を握ろうということですね。ところがその後、12月8日、9日に王政復古のクーデターが起きて新政府ができます。

比較的近年の研究で、慶喜はこのクーデターが起これることが分かっており、しかもその後、いわゆる公議政体派の巻き返しによってですね、慶喜自身がその政権に参加するというはずだったということになっています。これが幕末の状況です。

徳川宗家は力がありますので、もしこれが新政府の中に戻ってくる。あるいは参加してくる。そして徳川慶喜の能力を考えた場合、薩長から見れば、これを排除するには戦争を仕掛けるしかない。というのが、例えば西郷とか、大久保とかのギリギリの決断ということです。彼らは兵力的にも客観的には少数であり、その中で、戦争を仕掛けることによって、事態を打開するという状況にまで追い詰められていたというのが直前の状況であったと思います。

■司 会（渡辺）

ありがとうございます。ご参加の皆さんもこれでよく理解できたのではないかと思います。

慶喜は、王政復古のクーデター自体を、実は予見してたのではないのか、把握してたのではないのか。その上でおそらく当時の力関係からいって、どういう名前になるかわかりませんが、自らが議長となって、おそらく復権できると踏んでいた。そのへんの見通しを持っていたのではないのか、ということ指摘していただきました。

こうなると、もう薩長の側では実力で対抗するしかない、となって戦争に踏み切ったんだ、ということですね。ありがとうございます。

これで鳥羽伏見の戦いの直前段階の慶応3年、4年のそれぞれの藩の状況について、簡単にではありますが理解できたと思います。

それではこれから、いよいよ戊辰戦争の戦時過程へと話を移していきたいと思います。今日お集まりの皆様には、各藩の武器や戦術の問題、あるいは地域の被害状況など、いろいろ関心の高いテーマをお持ちのことと思いますが、その前にまずなぜ実際の戦争になってしまったのか、具体的な政治過程を踏まえつつ政治の問題について、この点から確認していきたいと思います。

最初に鳥羽伏見の戦いに勝利した段階で、いわゆる京都の官軍側は、幕府の本拠地である江戸を攻めべく東海道、東山道、北陸道の三方向から、それぞれ鎮撫総督軍を送り出す訳ですが、その流れの中で、それらとは別に奥羽鎮撫総督軍を派遣すると決定します。

その結果、具体的には、奥羽鎮撫総督の軍勢が松島湾に船で乗り込んでくる訳ですが、そのとき官軍側はどのような奥羽対策を考えていたのでしょうか。東北地方に対してどう臨もうとしていたのか、官軍側はどういう考えを持っていたのか。このへんの確認を保谷先生からお話しいただきたいと思います。保谷先生お願いします。

■保 谷

先ほど少し申し上げたのですが、ざっくりとしたことで申し上げると、いわゆる武備恭順という形で新政府には従いますよと、しかし、武装解除はしない者もいたわけですね。そうして会津、庄内の追討が次々命ぜられていくわけですが、新政府側としては徳川家との主従関係を否定して、天皇との君臣関係に組替えようとする大きな目的の中で、例えば徳川家が旧主であろうとも、これに兵力を出して追討軍に加わるべき、あるいはそうではなく、それは新政府に敵対するものだね、と諸藩に迫っていくのだと思うんですね。

おそらく、庄内にしても明白なものはないけど、旧主に対して弓を弾くことができないと言ってしまふこと、そのものが敵対だという形で迫られてくる。逆に言えば、会津や庄内はそういう形を表明す

ることによって、むしろ最後まで武士としての意地を貫くというか、面子を保つということになって、会津と庄内に同盟が結ばれていく形になるうかと考えています。

■司 会 （渡辺）

ありがとうございます。いまのような官軍側の動きがあったようですが、それを受けてですね、今度は官軍側からそういった政策をとられた東北側では、具体的にはどういう動きをしていくのか、その点について確認したいと思います。

最初に秋田藩の動きから考えていきたいと思います。慶応4年の3月、奥羽鎮撫総督が薩長の軍勢に守られて、仙台藩の松島湾に上陸してきます。一方、東北諸藩の側ではいくつか経緯はあるんですけども、一連の動きの中で、奥羽越列藩同盟を結成することになります。するとその過程で庄内追討に出陣していた沢副総督は、仙台藩など列藩同盟軍の追っ手を恐れて、先ほども話したように5月1日に秋田藩領に逃込んできます。

そのとき、秋田藩はまだ奥羽越列藩同盟に加わっていて離脱していません。その秋田藩が同盟側の一員として、沢副総督を取り押さえて仙台藩に引き渡すという判断はなかったのかなあと素朴に思っていますが、実際にはそういうことはなかった訳ですね。そのあと秋田藩は同盟を離脱して、東北諸藩から「裏切り者」というレッテルを貼られてしまう訳ですけども、そのへんのところを含めて秋田藩の動きについて、畑中先生からコメントをいただきたいと思います。よろしくお願いします。

■畑 中

奥羽列藩同盟の取り決めでは、奥羽鎮撫副総督沢為量の身柄は、米沢藩が確保することになっていました。最上川沿いを下って庄内に攻込む作戦を沢はおこなうわけですが、これに失敗、秋田藩領に逃れてきます。沢が秋田に入国しようとした理由は、このとき沢の命令で秋田藩も庄内藩に攻め込んでいたからです。かくまってもらえると考えたのでしょう。

院内の藩境で沢を迎え入れた部隊は、実は庄内藩に攻め込むために出陣した部隊です。彼らは沢の命令で出陣しているわけですから、沢の入国を拒否する動きにはできません。しかし、久保田の藩庁は異なります。奥羽列藩同盟の盟約に従って沢を引渡せば

朝命に逆らったことになります。逆に沢をかくまえば、同盟に違背したかどで制裁措置を受けることになります。ここで完全に板挟みになる訳です。庄内出兵をしながら奥羽列藩同盟に加盟してしまったというダブルスタンダード、板挟みの状況を生んでしまった訳です。

そこで慶応4年7月3日の夜に、先に庄内出兵をした砲術所藩士たちが、家老を説得して、秋田藩は新政府側につく態度を明らかにするのですが、藩庁の中には戦争回避を訴える藩士がいました。しかし、新政府に味方をして、同盟に味方をして、どの道、戦争を避けることはできません。戦争をする以上は、先ほどの長南さんの発表レジュメにもありましたように勝たなければなりません。目の前の憎くもない人を殺すという事実、これが起きるのです。もっともそれ自体が非人間的でありまして、そこに綺麗も汚いありません。

戊辰戦争が起きて150年経過し、これまで秋田藩は裏切ったと感情的になる人たちはいました。しかし、150年経って裏切りだと感情論で言っている先がありません。あの戦争にいったい何の意味があったのかが分からなくなる。本質が分からなくなってしまうのです。感情論を超えて同時代の古文書で戦争を見るという勉強をしていきたいと考えております。

■司 会 （渡辺）

ありがとうございます。一方、列藩同盟側は沢を確保すべく使者を秋田城下まで派遣してくる訳ですけども、その肝心の仙台藩の国元では、幽閉していたはずの九条総督を、結果的に脱出させてしまいますね。このへんの仙台藩の動きについては、周りから見てもわかりづらいところがあるんですが、この点、仙台藩の動きに関して栗原先生いかがでしょうか。

■栗 原

もともと仙台藩と米沢藩は会津藩に取りあえず謝罪させて、それで会津攻撃の名目を失くすと。それを嘆願することで、戦争を中止させようと考えていました。会津藩の謝罪は、中途半端なものになってしまうのですが、その過程で仙台藩・米沢藩の重臣は、自分たちが京都に向いて太政官に嘆願することを計画しています。

これは奥羽地方の状況だとか、あるいは自分たちの行動の正当性を新政府や全国の藩にアピールしようとするわけですね。実際に奥羽諸藩は太政官への建白書をつくっております。

ところが、その頃に九条総督が奥羽鎮撫のために盛岡・秋田の方に出向いて、そこから自分が京都に行くというようなことを主張する。自分が奥羽のことを説明するから、仙台を出たいというわけです。実はこの策を練ったのが、新政府軍の援軍として船で仙台藩領にやってきておりました佐賀藩の前山清一郎です。

前山は仙台藩の首脳陣と会談した時に、奥羽諸藩の立場に共感した振りをするんですね。そのため仙台藩の首脳というのは、佐賀藩というのは奥羽を助けて、自分たちといっしょに薩摩を討つつもりがあるんだと誤解してしまうのです。

先ほどもちょっと申し上げましたが、仙台藩というのは、戊辰戦争の前に連携していた佐賀藩や熊本藩などの西国の藩に、期待している部分がありましたので、こういった態度に欺かれてしまいます。つまり、佐賀藩とか九条が、奥羽のために仕事をするのはと考えてしまいます。

土壇場で仙台藩も、九条に仙台を離れないように嘆願するのですが、結局押し切られてしまいました。以上です。

■司 会（渡辺）

ありがとうございます。そこで次に7月4日、久保田城下を訪れていた仙台藩士を秋田藩士が暗殺して、列藩同盟から離脱するという事態に展開していきます。そこまでの段階で庄内藩は、どのような動きにあったのか、今度は庄内藩について長南先生お願いいたします。

■長 南

庄内藩に関しましては、各戦線に応援部隊を派遣しております。5月上旬ですと越後長岡の方に派遣しておりますし、先ほどの報告で申し上げたように7月には白河口の方にも一番大隊、二番大隊ですね、後に秋田攻めの主力となった部隊を派遣しております。

その中で、大変興味深い出来事があります。6月上旬に会津藩と連名でプロイセンに対して蝦夷地を売却することを内密に打診しております。その売却

した見返りに、軍事的な支援をプロイセンに要求していたといわれていますが、結果的にこの要求は、拒絶されて成立はしていません。これは近年明らかになった大変興味深い動向であります。

■司 会（渡辺）

ありがとうございます。ここで、この時期の官軍側の動きについて今一度、確認しておきたいと思います。

慶喜が謹慎する。江戸城が無血開城される。あるいは旧幕臣の大鳥圭介や榎本武揚が脱走する。宇都宮城の攻防から二本松少年隊の悲劇。そして官軍側の会津包囲というように、一連の事態が進展していく訳ですけども、そういう中で、東北地方に対して官軍側はどのように臨もうとしていたのか、先ほどもお話しいただいた点ではありますが、もう一度保谷先生からこの点についてお願いしたいと思います。

■保 谷

先ほど長南さんからお話があったので、少し全体的な話をします。国際情勢の件は、先ほどの話では飛ばしてしまいましたが、ご存じのように欧米列強、これは局外中立ということを謳っています。

特にイギリスなどは、2年ぐらい前から薩摩と薩長中心の動き、それから旧幕側の動きに対して、イギリスはあくまで貿易をやりたいのであって、日本の国内政治に対しては中立を守るという方向を出しているわけですね。

実際に長崎、兵庫が新政府側に落ちる、横浜、箱館を旧幕側が押えるという状況下で、局外中立という政策を出すわけです。しかしながら、外国人や外国人居留地に対して、何らかの攻撃があった場合は黙っていないぞという態度をとりますので、この戦争はいわば列強監視下の戦争であると言えようかと考えています。

一番先に新政府が承認したのは、閏4月1日、イギリスが公使信任状を天皇に提出しまして、明治新政府の正当性を初めて承認するのですが、他の国々は、そういう事をなかなかやらないのですね。ほとんどの国々が、東北戦争が終了するまで、つまり諸大名間で対立抗争が起きている間は、内戦状態が継続しているということから、どちらかを公認することはやらないのですね。

しかし、旧幕、徳川慶喜が絶対恭順し、新政府側が横浜を接收することになりますと、先ほどから申し上げていますように長崎、横浜、兵庫と重要な貿易港を新政府側が接收し、圧倒的な優位を保つようになってきます。

実のところ新政府は東北に対して、かなり長期戦も覚悟したのではないかとされているのですが、先ほど申し上げたように、海軍力の整備が行われ、そして二つの上陸作戦があつて、そのあたりからガラッと変わっていきます。かなり早い時期から（海上から）兵力を投入して、列藩同盟に対応するというかたちになっていったと考えられます。

海外に残る日本関係史料の調査からも、とても興味深い事実が明らかになってきております。北ドイツ連邦を構成したプロイセンには、当時鉄血宰相と言われたビスマルクがいましたが、駐日公使フォンブランクトは、蝦夷地にプロイセンの海軍基地を設置すべきだという報告書を出しています。蝦夷地は東北諸藩などに分割領有されており、会津や庄内の領分を租借しようということだったかと思いますが、当初ビスマルクはこの策を退けます。しかし、他の国がどうも日本に手を出しそうだとの情報を得て、のちにこれを許可します。

そのあたりがドイツにある史料でわかってきています。ただし、実際にはゴースサインが来たときには戦争が終わっていたので、まあどうなったのか何とも言えないのですが、これが最近の研究成果です。

私自身も英国で見た史料を紹介したことがあります。それは、会津藩が領内の鉱山採掘権を50万ドルで外国商人に貸し与える、そのために代理人と契約するという記録でした。これは戦争遂行のなかで、列藩同盟側は勝利のためにさまざまな財源獲得策を考えていたことになるでしょうか。

■司 会 （渡辺）

それでは次に、いよいよ戦時過程の方に議論を移したいと思います。ほぼ、連戦連敗を続けた秋田藩ですが、保谷先生からは先ほどの基調講演で、この戦争で用いられた武器についてお話いただきました。ここにご出席のたくさんの皆様からも秋田藩側、列藩同盟側それぞれの武器、装備面について質問が寄せられています。

そこで最初に、秋田藩の武器、特に鉄砲について、また、それを使う兵士とその軍事編制の問題も含めて畑中先生からコメントをいただきたいと思います。

先生よろしくお願いします。

■畑 中

意外に思われるかも知れませんが、幕末の段階で秋田藩は自前でゲベール銃やミニエー銃を製造しており、その操作に熟達した藩士もかなりいます。この点については『横手市史』（史料編 近世二 p. 637）に関連史料がありますので、興味のある方はご覧願います。

では、洋式銃を持ちながら、なぜ秋田藩は有利に戦争を進めることができなかったか。秋田藩の部隊の最小戦闘単位は、直臣と陪臣からなる家の軍隊です。しかも武器自弁の法則が貫かれています。つまり戦国時代と同じ軍の編成で出陣しているわけです。あえて戦国時代との違いをあげれば、藩士が馬を飼っていない点です。

藩士一人ひとりが洋式銃を携帯していたとしても、それは洋式銃を扱う技芸にしか過ぎず、戦列化していないのです。

そしてもう一つ。秋田藩の洋式銃は、立って銃口から弾を込める先込式の銃ですので、銃撃戦になった場合、銃手が恰好の標的になります。そうならないようにするため、戦地では馬蹄形に土を盛る「台場」を築きます。それゆえ、藩士は移動した先々で土木作業をするわけです。

その一方、庄内藩は、大きく回り込んで秋田藩の後方から襲いかかる戦法をとります。

誰しも弾丸は怖い。秋田藩は台場を築造して弾丸の恐怖を克服しようとし、庄内藩は動いて克服しようとする。陣地戦対機動戦これが秋田藩対庄内藩の戦争の様相になっていました。

■司 会 （渡辺）

一口に洋式銃といっても、秋田藩士が使った洋式銃は先込式で、戦闘中に上半身を上げないと弾を込められなかったため、戦闘に入る前に、まず弾除けの土木作業をやらなければならなかった、ということですね。畑中先生どうもありがとうございます。

これに対し最新の洋式銃は、兵士が身を伏せたまま、つまり戦場に横たわったままの状態でも銃身の後ろから弾を込める元込式だったようです。この点は先ほど保谷先生からお話いただいたところではございますが、いま一度、こうした銃の進化について保谷先生に教えていただきたいと思います。

■保 谷

銃砲の性能を見たときには、球弾を用いた火縄銃やゲバール銃と尖頭弾のライフル銃とは大きな違いがあります。

ライフルは先込め（前装式）から元込め（後装式）へ変化しますが、元込め銃の弾は、弾丸と発射薬、雷管が一体化したカートリッジになっていましたので、国内ではそれ自体を大量に生産することが出来ず、主に輸入に頼っていたと考えられます。戊辰戦争では、自分たちで作ることが出来る先込め（前装式）の小銃や弾丸が一般に使用されていました。

問題はこういった銃砲を使いこなす軍制改革の状況ですが、戊辰戦争が始まった段階で、そんなに大きな時間差があるわけではなく、実際には一年とか一年半くらいの差なんですね。洋式部隊を編制し、これにライフル銃を導入して、それに見合う散兵戦術などの訓練を行う。これが出来ているかどうか、大きな戦力差につながっていたわけです。

実際には戦争でこういった体制、戦闘のやり方を整えていくことになります。新政府側の高知藩などでも、板垣退助が指揮して西洋式の銃隊が組織されて高知の城下を出ますが、当初は先込め（前装式のライフル銃に弾丸を込めるに、先の尖った方を下にして銃口から入れるのか、あるいは上にして入れるのか、それすらわからない隊員が多かったといいます。関東へ進軍する中でだんだん形が整ってきたのですね。

もう一つは軍夫動員なども含めて、戦争遂行の体制をどのように組み立てることが出来たかが、勝敗に大きく影響したと考えています。戦闘部隊をどのように準備したとしても、武器や弾薬、兵糧や物資を前線へ送り込むための輜重部隊が組織されていないと戦争はできません。このあたりも大切な要素だと考えています。

■司 会（渡辺）

ありがとうございました。次に仙台藩について考えてみたいと思います。仙台藩では旧来の和銃と洋式銃を混用して部隊を編制していたようですが、そうした装備面での問題点、あるいは仙台藩から秋田藩に攻め込んでくるにあたっての食料、弾薬の補給、戦費調達などはどうなっていたのでしょうか。栗原先生からコメントをいただきたいと思います。

■栗 原

仙台藩は良く言えば給人の連合軍、悪く言えば寄せ集めになります。報告でも触れましたが、給人部隊の装備や編制はバラバラです。仙台藩降伏時には、ミニエー銃が5,000挺あったようですが、結局、施条銃を準備できるかどうかは、個々の給人領主次第ということになります。

奥羽戊辰戦争は、当初白河が戦場になりますので、仙台藩はまずそこに出兵します。ただ、それだけではなくて、給人は国境線や海岸線に警備の部隊を展開しているという現状があるんです。様々なところに部隊を出さなければならぬわけですね。そこから秋田に攻め込むことになりますと、給人によっては、全軍ではなく、1小隊・2小隊といった単位で出兵することになります。さまざまな給人部隊がありますので、それだけ装備や編制の差も大きくなりますね。

戦費につきましては、これは一般論になりますが、藩では、例えば村々から徴収したり、あるいは御用商人から徴収します。また、武器は生糸や蚕種で外国から購入しています。武器・弾薬は当初足軽や百姓を使って国許から輸送していたようですが、弾薬が足りずに庄内藩から借りたこともありました。

■司 会（渡辺）

ありがとうございます。部隊編制でいえば、秋田藩の史料ではマタギを集めた獵師隊を組織したことが知られていて、それは仙台藩にもあったようです。こうした点では庄内藩の場合、農民を集めた農兵隊が組織されたようですが、庄内藩の部隊編制や戦費調達などについて、長南先生からコメントをいただきたいと思います。先生お願いいたします。

■長 南

まず、先ほどの報告でも若干触れましたが、庄内藩の農兵、町兵は村や町毎に石高、軒数等に応じて徴発された人および志願した人により編成されたそうです。徴発されたのは長男ではなく二男、三男でして、後に起こる第2次大戦中の日本の徴兵制を思い起こさせるようなこともやっております。

次に庄内の農兵、町兵の特徴は装備が大変豪華であったことです。最新式の連発銃を自前で持っていた者もいたぐらいでして、特に町兵には大変裕福な商人たちが多く、商兵なんて言い方もされています。

最後に庄内藩の戦争の費用ですが、皆さんご存知だと思いますが、本間家という大変裕福な豪商がおりまして、そこからものすごい献金がなされているわけです。一説によりますと20万両ぐらいを藩の戦費として献上したという話もありまして、今の価値にしますと100億とかそんな金額になってしまうのでしょうか。あまりよくわからないのですが。本間家の財力が庄内藩にとって、やはり大きかったと言われていると思います。

■司 会（渡辺）

ありがとうございます。庄内藩は豪商本間家の支援を受けていた、ということですね。

ここで少し視点を変えて、やはり皆さん興味があるところだと思いますが、実際の戦争では仙台藩や庄内藩の兵士が兵糧や軍資金の提供を求め、それを拒否すると秋田藩領の村々に火を放ったといわれています。それは史料的にも明らかですし、また村々にも言い伝えられています。

肝煎たちは、秋田に攻め込んできた同盟軍の要求に苦しめられました。要求を拒めば村に火を付けられてしまうので、肝煎の中には要求に応じて食料や軍資金を指し出した者もいました。すると、戦争が終わってから、今度は秋田藩側から逆に、敵に手を貸した裏切り者だと問い詰められて、中には投獄された肝煎もいます。ひどい話です。

こうした点は地域の歴史にとっては、かなり重要な問題だと思いますが、秋田藩の立場から畑中先生からコメントをいただきたいと思います。

■畑 中

大仙市アーカイブズ所蔵六郷御役屋文書の「仙北郡兵火ニ付焼失取調書」を見ると、小種村・刈羽野村・北ノ目村などは、人家の焼失割合が80%を超えています。戦場になった村は敵味方双方から火をつけられるのです。

その一方で、『横手市史』（史料編 近世二 p. 721）を見ると、仙台軍政府が特定の領民の家を焼かないように指示を出しております。その家が放火を免れることができたのは、敵の軍将に献金したからだという伝承が残っております。

■司 会（渡辺）

ありがとうございました。戦場の現実というものが見えてきたように思います。

では次に、攻め込んできた側の仙台藩や庄内藩側では、こうした点について、どのように考えられているのでしょうか。中々発言しにくいところではあると思いますが、フロアからは、やはりこのときの戦争で民家が焼かれたという意見が寄せられています。わかる範囲で結構ですので、放火や略奪について仙台藩や庄内藩では、どのようなことが伝えられているのか教えていただきたいと思います。栗原先生、長南先生の順にお願いします。

■栗 原

たしかに発言しにくいことなのですが、なぜ発言しにくいのかといいますと、仙台藩側の史料には、地域の被害状況が残らないんですね。

断片的なところでの話になりますが、例えば放火についていいますと、水沢の軍務局に出兵中の部隊から、百姓が村を焼かないでほしいと歎願してきているとの報告があがっています。

あるいは出兵中の部隊が、どここの村は仙台藩の軍事御用を務めているから家を焼くなという命令を出しています。当然、保証をもらえなければ焼かれるわけです。

また、分捕りですが、軍務局にリストを出しまして、分捕品を会計方が処理することになっています。分捕った者には褒美を与えることになっております。

ただ一方では、民百姓の品は分捕るなどの通達が何度も出ています。実際は守られていないということですね。これは仙台藩の史料ではないのですが、粗末な布団をもっていった金を払うよう強要したという話や、村人がこうしたことを他の藩に訴えたという話も残っています。仙台藩側の理屈としては、これは交換なので分捕りではないということのようですが、実質は分捕りですね。こうしたことが行われる背景には、各部隊の物資や手当金が不足しているということがあると思います。

この辺は、史料的にはまだまだ分からないですが、強奪は藩兵だけではなく、連れてきた人夫が行うこともあったようです。

■長 南

庄内藩についてですが、秋田へ出撃する前、二番

大隊隊長の酒井吉之丞が厳しい軍令を発しておりまして、むやみに放火、略奪等は絶対するなと藩兵に命じています。

恐らくですが、秋田藩領に入って領民を敵に回すということが得策ではないことは、当然、庄内藩側も理解しており、厳しい軍令を出したのはそういう理由だと思っています。逆に敵対する者には、厳しく当たったことの裏返しなのかなと思います。現に敵対者には放火等をしたという記録もございますし、その辺は疑いようのない事実だと思います。

ご質問をいただいた庄内藩が撤退するときに家々を焼払いつつ、民衆を皆殺しにしたという話についてですが、私、庄内生まれでして、戊辰戦争の事を現地の研究者なり、いろんな人から聞きましてもこう言う話は一切出てこないわけですね。庄内藩側の史料を見ますと、当然こうした書き方はしないわけですね。秋田から撤退して来るときはですね、庄内藩は久保田城を前に涙して帰って来たなんて、美談めいた話も残っており、庄内藩兵が秋田藩の領民にこのような行いをしたことは、ほとんど伝わっていないと思います。これは庄内藩側の史料ゆえの問題かと思っています。

今回こうした質問をいただいて、自分としてどう答えたらいいのか困るところもあるのですが、恐らく戦場という過酷な状況下では、そういった行いもあったのだらうなと私は思います。今まで秋田領内で庄内藩は、比較的好意的に受け留められていたと、庄内で語られておりますが、今回ご質問いただいた事項も踏まえて、戊辰戦争中、庄内藩が秋田藩領内でどういったふるまいをしたのかと、もう一回考え直す必要があると思った次第です。

■司 会（渡辺）

栗原先生、長南先生ありがとうございます。放火や略奪の被害を受けたこの場所で、いわば実行犯の立場から発言される難しさがあったかと思っています。ほぼ負け続けの秋田藩側でしたが、戦場となった村々の苦しみをあらためて感じる事ができました。

さてここで、秋田藩の支援に駆け付けてくれた西南諸藩について目を向けたいと思います。官軍側の西南諸藩が海路、秋田藩の応援に来てくれて土崎湊に上陸します。今日はその一つ、宮崎県の佐土原藩からもゆかりの皆様が、このシンポジウムにご参加いただいています。

沢副総督のもとで、その一部隊として動かざるを

得なかった秋田藩については、先ほど畑中先生からご指摘いただいたところですが、西南諸藩が応援に駆け付けてくれた後は、どのようなことがあったのか、その後の秋田藩について畑中先生からコメントいただければと思います。

■畑 中

西南諸藩の援軍により戦力が強化し、領内北部の戦いでは反転攻勢に成功します。しかし、戦場で兵士が強いというのは残虐だということでもあります。

戊辰戦争から60年経った昭和3年、もう一度干支が回って戊辰の年となった昭和3年1月1日の「秋田魁新報」に、60年前の戦争経験者たちが当時を回顧する証言が10日以上にわたって掲載されます。その中で、鍋島（佐賀藩）の兵隊は残虐だったという思い出を語る老人がいます。

また、秋田藩士中安泰治の日記には、新政府軍の本営が置かれていた神宮寺で、島原藩士が怒ったという記事があります。島原藩士は藩主の代わりに一国を代表して来ているのに、中安のような身分の藩士に指図を受けることに反発しているのです。

新政府軍は、各藩が協力して戦ったというイメージを抱きがちですが、同時代の史料を見ると必ずしもそうとは言えない一面が見えてきます。

■司 会（渡辺）

ありがとうございます。秋田藩領南部を中心に、実際にあった戦闘に即して振り返ってきたところですが、ここで秋田藩領北部での戦闘も含めて、秋田戊辰戦争とは何だったのか、この戦争のもつ意味は何なのか、こういう点について保谷先生からコメントをいただきたいと思います。先生お願いします。

■保 谷

会津藩をはじめ、同盟側が次々と新政府側に降伏すると、秋田戦線の庄内藩もじゃあ戦争は止めようということになりますが、庄内勢はあまり負けていなかったことで、引き上げる際にも余裕があり、大量の武器弾薬を自領に持ち帰りますが、その際にも軍夫、人足に出てこない町を焼き払うぞと脅して、人々を動員して悠々と引き揚げたわけです。

先ほどから出ている分捕や放火などというものの、戦争のやり方のひとつであって、敵、味方どちらも

行っています。放火は戦術の一部ですから、これを避けようと村々では進軍してきた側に情報を与えたり、軍夫で協力したりします。ところが、逆の側が押し込んでくると、今度はそれが咎められたりするわけで、戦場となった村々は本当にひどい目にあいました。

戦争する側からすると、村々の協力をどう得るかということも必要でした。特に軍夫です。秋田藩では南方を落とされ、北方に南部藩が侵入してくると、もはや軍夫動員ができなくなりました。軍隊を動かすことすら出来なくなるわけです。

それから、今日はあまり話をしませんでした、勝ちに乗じた残虐行為も戦場では目立ちます。太平洋側のことですが、新政府の参謀から敵兵の死体をいたぶる行為を戒める通達なども出されています。

この戊辰戦争は、戦争のやり方が近代化すると同時に近世最後の戦争であり、いわば戦国以来の凄惨な戦場慣行もまた見られたということを申し上げておきたいと思います。

■司 会（渡辺）

わかりました。秋田戊辰戦争は近代的な戦争の始まりであると同時に近世的な要素を多分に残した戦争であった、ということをお教えいただきました。ありがとうございました。

さて、残り時間も大分少なくなってまいりました。そこで、戊辰戦争を終えたあと、明治、大正の近代国家になって、それぞれの地域では、あの戊辰戦争をどのように捉えてきたのか、おそらく各藩・各県、三者三様の見方がなされてきたと思います。最後に、この問題について考えてみたいと思います。

畑中先生は、これまでに勤皇秋田藩のイメージが形成されていく過程についてご研究を発表されていますが、ここであらためて秋田藩にとって戊辰戦争とは何だったのか、そしてその評価はどう変化したのか、この点についてコメントをお願いします。

■畑 中

明治時代になると、秋田藩戊辰戦争の記憶は、誰もがわかりやすい、血湧き、肉躍る英雄が活躍する戦争像、歴史物語になります。しかし、昭和30年代の『秋田県史』編纂以降、同時代の古文書の持つ重要性が認識されるようになりました。

昨年(平成29年)大仙市アーカイブズが開館し、

大仙市域の古文書を一堂に集める施設ができました。これから、ここに集められる古文書を見て、正しい歴史像を描いていきたいと思います。

■司 会（渡辺）

ありがとうございます。続いて仙台藩、庄内藩ではどうだったのか、栗原先生、長南先生、続けてお願いします。

■栗 原

仙台藩が敗戦して、賊軍や朝敵だと言われたという事実は、宮城県民の意識に染み込んでいきます。東北地方全体でいえば、後進地や未開の地というような負のイメージがつきますけど、宮城県もその中に含まれますので、イメージに対する反発が生まれます。

明治22年に帝国憲法の大赦令が出まして、明治・大正期には、伊達家の復権を図る動きが活発になってまいります。そこで主張されるのが、伊達家は勤王であるという言説です。

そこでは、戊辰戦争の仙台藩は勤王だったという、正当性を訴えるような主張も登場します。ただ、仙台藩の場合、幕末の藩主が勤王だったとか、戊辰で勤王の行動をとったという話が、他の地域よりできませんので、戊辰戦争とは別に、さかのぼって伊達政宗が勤王だったという話を始めるんですね。畑中先生や長南先生のご研究にもつながるかと思いますが、政宗の功績について、さまざまな歴史のねつ造が行われます。

そして、政宗が奥羽を制圧したんだ、伊達は奥羽の旗頭で戊辰戦争でも奥羽の盟主になったではないかという話がなされます。それに、近代以降の東北地方の中で、仙台が中心的な立場にあるということも加えて、県民は地域での自意識や自尊心を拡大していきます。戊辰戦争の捉え方や影響というのは、歴史意識だけでなく、地域意識の面からも考えていかなければならない問題だと思います。

■長 南

戊辰戦争において、曖昧な理由で庄内藩は朝敵にされた歴史、そして明治以後に庄内の外側で語られる戊辰戦争の歴史がありますね。それに対して庄内の中で「庄内は賊軍にあらず」という、庄内藩の名

菅回復を目指す動きが長きにわたり継続するわけです。

その中で庄内出身の人物が、明治以降、国家から評価されないのは、庄内藩が戊辰戦争で賊軍になったからという見方がされていくわけです。さらに庄内藩はですね、戊辰戦争に敗れはしましたが、それほど大きな処分を受けてはいないわけです。5万石の石高は没収されたのですが、結局、藩は庄内に留まります。その藩士中、上層の人たちがですね、明治以降一団をつくって庄内の政治・経済・教育等の分野で強い力を持ち続けていきます。

そういった人たちを庄内では「御家禄派」と呼んでおりまして、その中心人物が、幕末に庄内藩政を主導していた重臣松平権十郎および菅実秀という人物です。

松平権十郎は薩摩藩邸焼討の際、藩兵を指揮した人物であります。さらに庄内藩が軽い処分で済んだのは、西郷隆盛のおかげであるという話が出てきます。戊辰戦争後、庄内藩には会津若松と磐城平と2回も転封しろと命令が出ますが、結局これが撤回になっています。

庄内藩の中には、軽い処分で済んだのは西郷のおかげであるとの話が広まります。ただし、西郷自体が庄内藩の処分を軽くせよと命じた証拠はないようです。ともかく西郷を信奉する集団というか、そういうものが庄内に出来ております。明治以後、庄内ではそういった一団の絡む問題が発生していきます。小作争議や旧藩士内の主導権争いなど、いろいろ小競り合いが起きてくる。その中で、必ず戊辰戦争の歴史というものが持ち出されていることが確認されます。

庄内にもたらした戊辰戦争の意味は何かといえ、近代の庄内の歴史観と、その後の庄内の地域経営、その中で戊辰戦争の記憶は良くも悪くも、人や地域間の中での争いの火種になった。そういう意味を持ったと私は考えます。

■司 会（渡辺）

先生方ありがとうございました。戊辰戦争がその後の秋田、仙台、庄内のそれぞれの地域で三者三様の捉えられ方をして、しかもそれが変化していった様子について、詳しく理解することができました。

最後に、このシンポジウムを総括する意味で、戊辰戦争と東北地方という観点で保谷先生からコメントをいただきたいと思います。保谷先生お願いいた

します。

■保 谷

これはなかなかむずかしいのですが、たとえば今でも会津の人々はひどい目にあったというような見方があります。戦争に巻き込まれ、戦場となったという点ではその通りですが、斗南（下北）のようなひどいところで苦勞したとかいうことになる、私はちょっとどうかと思います。

会津の民衆が斗南に行ったわけではないし、そもそも元いた斗南の百姓はどうしたらいいのでしょうか。支配者としての武士は別問題です。それに、この戦争で腹を切らされた家臣はいたけれども、殿様は生き延びて、大名はひとつもつぶれていません。

いわば、薩長支配に反抗した大名たちをこの戦争で屈服させて、あらためて諸大名の上に立つ天皇の政権を打ち建てようとするのですが、結局これがうまくいかない。最終的に明治4年の廃藩置県クーデタによって、大名領有権を一気に撤廃し、集権化を行うことになります。この結果、西南雄藩の有司が新政府を牛耳っていくことになるのですが、これに対して中央から排除された東北では、自由民権運動などを通じて新政府に対抗していくという図式になるのだと思います。

■司 会（渡辺）

ありがとうございます。本日は大変実りある討論が出来たと思います。このシンポジウムに貴重なご研究の一端をご披露してくださいました先生方、そしてフロアから積極的に質問をお寄せいただき、熱心に討論を聞いて下さった皆様に心からお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

会場から出されました質問やご意見に、十分こたえられなかったことがあったかもしれません。すべて司会の不手際です。お詫び申し上げます。それではこれで本日のシンポジウムを閉じたいと思います。ご参会の皆様本日は本当にありがとうございました。

■事務局

渡辺様、進行ありがとうございました。大仙市アーカイブズ館長細川良隆が閉会のご挨拶を申し上げます。

■細川良隆（大仙市アーカイブズ館長）

本日は皆様、お忙しいところ、かくも多数、最後まで熱心にご参加を賜りまして、誠にありがとうございます。主催者として、心からお礼を申し上げる次第でございます。そして、専門的な知見で興味深いご報告いただきました、保谷先生はじめ栗原先生、長南先生、そして畑中先生、大変ありがとうございました。

また、本シンポジウムを史学会の大会として共催いただいた秋田大学史学会の皆様には、さまざまな面でご協力をいただきましたこと、さらには司会としてまとめ役をしていただいた渡辺先生におかれましては、本シンポジウムの企画段階から事前調整や準備など、多大なご理解とご指導をいただきまして、本当に感謝に堪えません。どうもありがとうございました。

明治150年につきましては、日本国内で多様な捉え方がなされ、各地で様々な催しが行われておりますが、大仙市におきましては、ご案内のように自分たちの郷土の歩みを知り、そして後に伝えるための節目の大事な事業として、ヘリテージツアーや企画展示なども含めて、私ども大仙市アーカイブズが担当しているところでございます。

本日のテーマの戊辰戦争については、先生方からのご報告にもありましたが、ふるさとが直接、悲惨な戦場になったにも関わらず、あまり多く伝承されてこなかったなど、歴史認識も含めて、情報が欠けているということも否めませんし、日本が大きく変わろうとする時代の流れの中で、ふるさとの様子や当時の人びとの気持ちを知ることのできる機会が少ない状況でもありました。

今回のシンポジウムは、ご専門の先生方の最新の研究に基づく新鮮な情報をいただきまして、市民の皆さんのこれまでの疑問が氷解するような有意義な機会になったと強く感じるものがあります。

加えて、大仙市内には戊辰戦争を伝える路傍の石碑や史跡、あるいは史料もたくさん残っておりますので、このシンポジウムが一つのきっかけとなり、大仙市の様々な歴史を正しく後世に伝えと共に、歴史文化遺産を活用した今日的な地域活性化につながって欲しいと願わずにはいられません。

最後になりましたが、戊辰戦争による有縁交流をしていただいております、宮崎市の戸敷市長様はじめ佐土原の「きょうわ会」の皆様方からも、当時と同じように遠く九州から援軍としてご参加いただきまして、感謝とお礼、そして、この会場にお越し

いただきました皆様に対し、改めて心からお礼を申し上げ、閉会の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

■事務局

これもちまして、大仙市明治150年第2回シンポジウム「近代への道程・戊辰戦争と人びと」を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。

編集後記

本報告書の内容は、当日の発表録音からの音声反訳であり、詳細については、シンポジウムを共催していただいた秋田大学史学会の機関誌「秋大史學」No. 65（平成31年3月発行）に、論文形式で紹介されておりますので、御高覧いただければと存じます。

報告書の刊行時期が遅れましたことをお詫び申し上げますとともに、ご発表してくださいました先生方、秋田大学渡辺英夫教授にあらためて感謝の意を表し、本報告書が市民の皆さんの歴史資料活用の一助になり、大仙市アーカイブズの充実につながることを願うものであります。

大仙市「明治150年事業」事務局（平成30年度）

【大仙市アーカイブズ】

館長	細川良隆
副主幹	森川悌一
主席主査	高橋一倫
主査	蓮沼素子
主任	岡田綾

編 集 ・ 発 行

大仙市アーカイブズ

令和元（2019）年12月21日

秋田県大仙市強首字上野台1-2